志木市の文化財　第39集

志木市遺跡群 17

城山遺跡第49地点

城山遺跡第57地点

西原大塚遺跡第113地点

西原大塚遺跡第124地点

2008

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財　第39集　志木市遺跡群 17　埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財　第39集

志木市遺跡群 17

城山遺跡第49地点

城山遺跡第57地点

西原大塚遺跡第113地点

西原大塚遺跡第124地点

2008

埼玉県志木市教育委員会

は　じ　め　に

志木市教育委員会
教育長　白砂　正明

志木市を地理的に眺めてみると、北側は荒川低地、そして南側は武蔵野台地に位置しています。特に、この武蔵野台地から低地に移行する手前の台地縁辺部には、古くは旧石器時代から残された遺跡がベルト状に分布しています。

当市では現在、こうした遺跡が14遺跡登録されていますが、これらの遺跡からは、今まで実施された発掘調査により、数多くの遺構・遺物が発見されています。

さて、ここに刊行する『志木市遺跡群17』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成16・17年度に発掘調査を実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

今回は、城山遺跡２地点分と西原大塚遺跡２地点分の合計４地点分の内容を掲載しました。

城山遺跡は、旧石器時代から近世にかけての幅広い時期の複合遺跡です。特に本遺跡内には、市指定文化財の『城山貝塚』があることで有名です。また、日本最古の土器群「爪形文系土器」が破片ですが、１点出土しており注目に値します。

今回報告する第49地点と第57地点では、古墳時代後期の住居跡や中世以降の土坑・地下室（ちかむろ）・井戸跡などが発見されています。

また、西原大塚遺跡は、市内最大の遺跡で、近年ではこの地区に西原特定土地区画整理事業が計画され、この事業に伴い、10年以上にわたり大規模な発掘調査が実施されてきました。これにより、この遺跡には、縄文時代中期後葉と弥生時代末葉～古墳時代前期にかけての２つの時期に大集落が形成されていたことが判明してきました。

今回報告する地点は、第113地点と第124地点です。第113地点からは、近世以降の土坑・地下室、第124地点からは、弥生時代末葉～古墳時代前期の住居跡３軒が発見されました。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる１ページが追加されたことになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げる次第です。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成17年度分の調査成果と平成16・17年度に発掘調査を実施した城山遺跡第49・57地点、西原大塚遺跡第113・124地点の４地点分を発掘調査報告書としてまとめたものである。

2．発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。

3．本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。なお、中世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤　均氏にご教示を頂いた。

　深井恵子　　第２・３章第３・４節の遺構、第４・５章第２節の遺構

　青木　修　　第２・３章第２節、第４章第２節（２）・（４）の縄文時代の土器

4．石器の実測及び観察表の作成は、（有）アルケーリサーチ（代表取締役　藤波啓容）に依頼した。

5．自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役　藤根　久）に依頼し、その結果を付編に併載した。

6．遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・鈴木浩子が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木　修が行った。写真撮影は青木　修が行った。

7．調査組織

調査主体者	志木市教育委員会
教育長	細田信良（平成12年７月～平成17年６月）
〃	柚木　博（平成17年10月～平成20年３月）
〃	白砂正明（平成20年４月～）
教育長職務代理者	新井　茂（平成17年７月～９月）
教育政策部長	杉山　勇（平成16年４月～平成17年３月）
〃	新井　茂（平成17年４～６月、10月～）
参事兼生涯学習課長	宮川英夫（平成18年４月～平成19年３月）
生涯学習課長	大熊章只（平成16年４月～平成18年３月）
〃	吉田　洋（平成19年４月～）
生涯学習課副課長	土岐隆一（平成20年４月～）
生涯学習課主幹	醍醐一正（平成16年４月～平成18年３月、平成18年８月～平成19年３月）
〃	内田　誠（平成18年４月～７月）
〃	今野美香（平成19年４月～11月）
〃	大熊克之（平成19年12月～）
生涯学習課主査	佐々木保俊（昭和61年４月～）
〃	今野美香（平成15年８月～平成19年３月）
生涯学習課主任	尾形則敏（昭和62年４月～）
〃	倉部恵子（平成14年４月～平成18年３月）
〃	高野雅也（平成20年４月～）
志木市文化財保護審議会	神山健吉（会長）
〃	井上國夫・高橋長次・高橋　豊・内田正子（委員）

8．発掘調査及び整理作業参加者

○城山遺跡第49地点

調査担当者　尾形則敏
調　査　員　深井恵子
発掘協力員　青木　修・遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子・藤岡智子（早稲田大学）
重機オペレータ　田中三二（大塚屋商店）

○城山遺跡第57地点

調査担当者　尾形則敏
調　査　員　深井恵子
発掘協力員　遠藤英子・鈴木浩子・星野恵美子・松浦恵子
重機オペレータ　田中三二（大塚屋商店）

○西原大塚遺跡第113地点

調査担当者　尾形則敏
調　査　員　深井恵子
調査補助員　青木　修
発掘協力員　遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子
重機オペレータ　田中三二（大塚屋商店）

○西原大塚遺跡第124地点

調査担当者　尾形則敏
調　査　員　深井恵子
発掘協力員　遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・星野恵美子・松浦恵子
重機オペレータ　田中三二（大塚屋商店）

○整理作業

調　査　員　深井恵子
調査補助員　青木　修
整理協力員　鈴木浩子・星野恵美子・松浦恵子

9．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

会田　明・浅野信英・荒井幹夫・石井　寛・井上洋一・上田　寛・江原　順・大谷　徹・加藤恭朗・加藤秀之・片平雅俊・暇本健介・栗原和彦・黒濱和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝　勉・小宮恒雄・齋藤欣延・坂上克弘・坂本　彰・笹森健一・斯波　治・渋谷寛子・鈴木一郎・鈴木重信・真保昌弘・高崎直成・高橋　学・田中広明・照林敏郎・鍋島直久・根本　靖・野沢　均・原　京子・早坂廣人・坂野千登勢・藤波啓容・福田　聖・堀　善之・前田秀則・松本　完・松本富雄・望月一樹・三田光明・宮瀧由紀子・柳井章宏・山田尚友・山本　龍・和田晋治・渡辺邦仁

城山遺跡第49地点（開発主体者　個人）
城山遺跡第57地点（開発主体者　個人）
西原大塚遺跡第113地点（開発主体者　個人）
西原大塚遺跡第124地点（開発主体者　個人）

凡　　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
　第１図　1：10000「志木市全図」アジア航測株式会社調製
　第２図・第21図　1：2500　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成15年８月発行　株式会社ゼンリン
2．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。
4．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位は㎝である。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6．遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示した。遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の場合は赤彩範囲を示し、石器の場合は使用跡を示す。
7．遺構の略記号は、以下のとおりである。
　ＦＰ＝炉穴　　Ｙ＝弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡　　Ｈ＝古墳時代後期の住居跡
　Ｄ＝土坑　　Ｗ＝井戸跡　　Ｐ＝ピット

目　次

はじめに
例　言／凡　例／目　次／挿図目次／表目次／図版目次
第１章　平成17年度の調査成果 …… 1
　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1
　第２節　調査に至る経過 …… 6
第２章　城山遺跡第49地点の調査 …… 10
　第１節　遺跡の概要 …… 10
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　第３節　古墳時代後期の遺構と遺物 …… 14
　第４節　中世以降の遺構と遺物 …… 18
　第５節　遺構外出土遺物 …… 24
第３章　城山遺跡第57地点の調査 …… 28
　第１節　遺跡の概要 …… 28
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 30
　第３節　古墳時代後期の遺構と遺物 …… 31
　第４節　中世以降の遺構と遺物 …… 35
　第５節　遺構外出土遺物 …… 39
第４章　西原大塚遺跡第113地点の調査 …… 42
　第１節　遺跡の概要 …… 42
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 44
第５章　西原大塚遺跡第124地点の調査 …… 55
　第１節　遺跡の概要 …… 55
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 56
第６章　調査のまとめ …… 61
　第１節　古墳時代後期の遺構・遺物について …… 61
　第２節　中世以降の遺構について …… 62
図　版
報告書抄録

［付　編］　自然科学分析
　城山遺跡出土動物遺体について …… 69

挿図目次

第１図　市域の地形と調査地点－平成17年度－（1／20000） …… 2
第２図　城山遺跡の調査地点（1／3000） …… 11
第３図　遺構分布図（1／150） …… 12
第４図　366号土坑（1／60） …… 13
第５図　161号住居跡（1／60） …… 14
第６図　161号住居跡出土遺物（1／4） …… 15
第７図　162号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3） …… 16
第８図　360号土坑・29号井戸跡（1／60） …… 19
第９図　360号土坑出土遺物（1／4） …… 20
第10図　土坑（1／60） …… 22
第11図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3） …… 25
第12図　遺構外出土遺物２（1／3） …… 26
第13図　遺構分布図（1／150） …… 28
第14図　土坑・出土遺物（1／60・1／3） …… 30
第15図　163号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3） …… 33
第16図　164号住居跡・出土遺物（1／60・1／4） …… 34
第17図　土坑（1／60） …… 37
第18図　30号井戸跡（1／60） …… 38
第19図　１号ピット出土遺物（4／5） …… 39
第20図　遺構外出土遺物（1／3） …… 40
第21図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5000） …… 43
第22図　遺構分布図（1／150） …… 44
第23図　15号炉穴・出土遺物（1／60・1／3） …… 45
第24図　土坑１（1／60） …… 48
第25図　土坑２（1／60） …… 49
第26図　遺構外出土遺物（2／3・1／3） …… 52
第27図　遺構分布図（1／150） …… 55
第28図　523号住居跡・出土遺物（1／60・1／3） …… 58
第29図　524号住居跡・出土遺物（1／60・1／3） …… 59
第30図　525号住居跡・出土遺物（1／60・1／3） …… 59
第31図　遺構外出土遺物（1／3） …… 59
第32図　城山遺跡における掘り込み部をもつ土坑集成（1／120） …… 64

表　目　次

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 1
第２表　平成17年度調査地点一覧 …… 7
第３表　城山遺跡第49地点の発掘調査工程表 …… 10
第４表　161号住居跡出土土器一覧 …… 17
第５表　162号住居跡出土土器一覧 …… 17
第６表　土坑出土の陶磁器・土器一覧 …… 23
第７表　遺構外出土の石器一覧 …… 26
第８表　遺構外出土の縄文土器一覧 …… 27
第９表　遺構外出土の陶器・土器一覧 …… 27
第10表　城山遺跡第57地点の発掘調査工程表 …… 29
第11表　土坑出土の縄文土器一覧 …… 31
第12表　163号住居跡出土土器一覧 …… 32
第13表　164号住居跡出土土器一覧 …… 35
第14表　遺構外出土の縄文土器一覧 …… 41
第15表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧 …… 41
第16表　土坑出土の陶器・土器一覧 …… 50
第17表　遺構外出土の縄文土器一覧 …… 53
第18表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧 …… 54
第19表　城山遺跡における掘り込み部をもつ土坑一覧 …… 65
第20表　城山遺跡出土動物遺体リスト …… 69

図版目次

図版１　城山遺跡第49地点
１．表土剥ぎ風景　２．調査風景　３．366号土坑　４・５．161号住居跡
６．161号住居跡遺物出土状態　７．161号住居跡貯蔵穴遺物出土状態　８．161号住居跡貯蔵穴
図版２　城山遺跡第49地点
１・２．162号住居跡　３．162号住居跡カマド　４．29号井戸跡
５．29号井戸跡・360号土坑竪坑　６．360号土坑板碑出土状態　７・８．360号土坑
図版３　城山遺跡第49地点
１．発掘風景　２．362号土坑　３．364号土坑　４・５．365号土坑遺物出土状態
６．365号土坑北西掘り込み遺物出土状態　７．365号土坑掘り込み　８．365号土坑
図版４　城山遺跡第49地点
１．161号住居跡出土遺物　２．162号住居跡出土遺物

図版５　城山遺跡第49地点

１．360号土坑出土遺物　２．365号土坑出土遺物

図版６　城山遺跡第49地点

遺構外出土遺物

図版７　城山遺跡第57地点

１．調査区近景　２．確認調査風景　３．375号土坑　４．376号土坑　５．377号土坑

６．163号住居跡　７．163号住居跡貯蔵穴　８．163号住居跡カマド

図版８　城山遺跡第57地点

１．163・164号住居跡　２．163・164号住居跡北から　３．164号住居跡　４．367号土坑

５．367号土坑竪坑

図版９　城山遺跡第57地点

１．発掘風景　２．368・369号土坑　３．370号土坑　４．371号土坑　５．372号土坑

６．373号土坑　７．374号土坑　８．30号井戸跡

図版10　城山遺跡第57地点

１．土坑出土遺物　２．163号住居跡出土遺物　３．164号住居跡出土遺物

４．ピット出土遺物　５．遺構外出土遺物１

図版11　城山遺跡第57地点

遺構外出土遺物２

図版12　西原大塚遺跡113地点

１．調査区近景　２．表土剥ぎ風景　３．15号炉跡　４．480号土坑　５．481号土坑

６．482号土坑　７．483号土坑　８．484号土坑

図版13　西原大塚遺跡113地点

１．485号土坑　２．486号土坑　３．487号土坑　４．489号土坑　５．491号土坑

６．485・493号土坑　７．494号土坑　８．調査区東側

図版14　西原大塚遺跡113地点

１．15号炉跡・土坑出土遺物　２．遺構外出土遺物

図版15　西原大塚遺跡124地点

１．調査区近景　２．表土剥ぎ及び遺構確認調査風景　３．523号住居跡　４・５．524号住居跡

６・７．525号住居跡　８．525号住居跡炉跡

図版16　西原大塚遺跡124地点

１．523号住居跡出土遺物　２．524号住居跡出土遺物　３．525号住居跡出土遺物

４．遺構外出土遺物

第１章　平成17年度の調査成果

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71㎞、東西4.73㎞の広がりをもち、面積は9.06㎢、人口約７万人の自然と文化の調和する都市である。

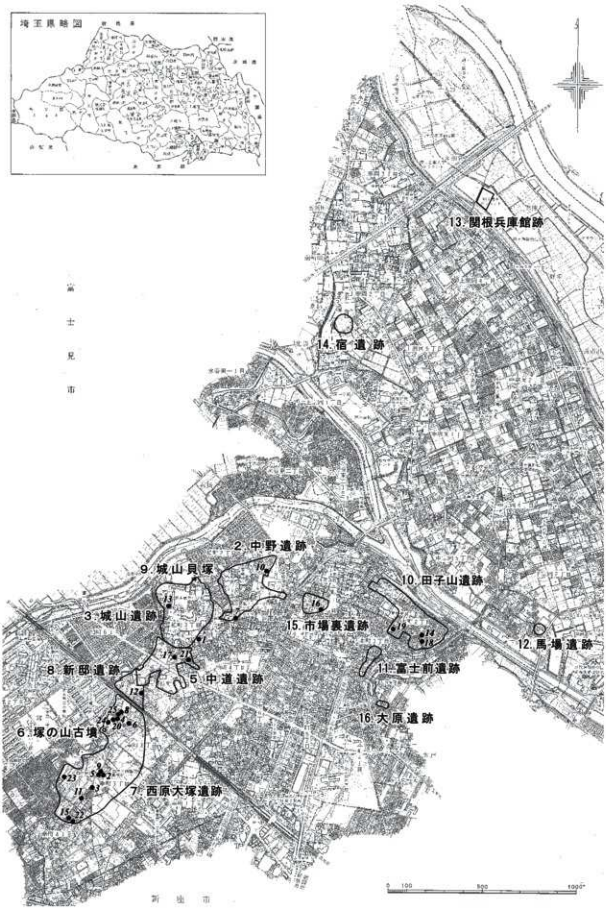
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（７）、中道遺跡（５）、新邸遺跡（８）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700 ㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	45,860 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 ㎡	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	163,930 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 ㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 ㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 ㎡	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 ㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 ㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 ㎡	グランド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 ㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	10,700 ㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 ㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		466,700 ㎡					

平成26年６月30日　現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第１図　市域の地形と調査地点－平成17年度－（1／20000）

関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた14遺跡である（第１図）。

（２）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成６（1994）年度には２ヶ所、平成７年（1995）度には１ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の２ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。

２．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成４（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点と平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土しているのみである。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡１軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡３軒（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が１軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも２基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の３遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第８地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ１基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在していたことが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

４．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第２地点の１号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第８地点の２～８号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成７（1995）

年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で２ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が１点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻回雑記』（註２）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1988・2002）。また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点

の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『舘村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第２地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成７（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭５枚を出土した土坑墓１基と13世紀に比定される青磁盤１点を出土した道路状遺構１条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第１地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓２基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『舘村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院（しょうりんざんかんのんじ だいじゅいん）」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

７．近代以降

近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第２節　調査に至る経過

志木市は、都心から25㎞圏内に位置し、東武東上線志木－池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

番号	調査地点	所　在　地	調査原因	面積（㎡）	確認調査日	発掘期間	備　　考
1	城　山　遺　跡 第　56　地　点	柏町3丁目2622-2の一部、-7・14	個人住宅建設	80.01	4.11		遺構・遺物は検出されなかった
2	西原大塚遺跡 第　114　地　点	幸町3丁目3162-1の一部	個人住宅建設	118.35	4.14		盛土保存適用
3	西原大塚遺跡 第　115　地　点	幸町3丁目3133-35、3147の各一部	個人住宅建設	50.73	4.19		遺構・遺物は検出されなかった
4	西原大塚遺跡 第　116　地　点	幸町2丁目3039-1、3039-2の各一部	個人住宅建設	103.66	4.25		盛土保存適用
5	西原大塚遺跡 第　117　地　点	幸町3丁目3126-1、3129-1・4の各一部他１筆	個人住宅建設	263.79	4.27		盛土保存適用
6	西原大塚遺跡 第　118　地　点	幸町2丁目3041-1の一部	個人住宅建設	165.16	5.16		盛土保存適用
7	中　野　遺　跡 第　64　地　点	柏町1丁目2578-6、2579-2	個人住宅建設	205.55	5.27		発掘届では102㎡、盛土保存適用
8	西原大塚遺跡 第　119　地　点	幸町2丁目3029の一部	個人住宅建設	218.02	6.20		盛土保存適用
9	西原大塚遺跡 第 120 - 1 地点	幸町3丁目3215の一部	保育園建設	460.56	6.22	6.27～7.5	H17.7.7埋戻し／H18年度に第120-2地点を実施
10	中　野　遺　跡 第　65　地　点	柏町1丁目1528-5	個人住宅建設	69.41	6.24		盛土保存適用
11	西原大塚遺跡 第 94 - 1 地点	幸町3丁目3116-2、3118、3134の各一部	共同住宅建設	328.79	6.28		盛土保存適用
12	新　郡　遺　跡 第　9　地　点	柏町5丁目2996-9	診療所 併用住宅	138.77	7.1		盛土保存適用
13	城　山　遺　跡 第　57　地　点	柏町3丁目1137-14	個人住宅建設	165.30	H15.8.26	8.29～9.20	H17.9.22・24埋戻し
14	田　子　山　遺　跡 第　90　地　点	本町2丁目1746-4	分譲住宅建設	113.66	8.2		盛土保存適用
15	西原大塚遺跡 第　121　地　点	幸町4丁目3390の一部	個人住宅建設	121.73	8.29		遺構・遺物は検出されなかった
16	市　場　裏　遺　跡 第　12　地　点	本町1丁目2489-13	共同住宅 一部店舗建設	582.56	10.3		遺構・遺物は検出されなかった
17	中　道　遺　跡 第　63　地　点	柏町5丁目2954-15・16	分譲住宅建設	251.75	10.11		盛土保存適用
18	田　子　山　遺　跡 第　91　地　点	本町2丁目1748-1	個人住宅建設	121.74	10.12		盛土保存適用
19	田　子　山　遺　跡 第　92　地　点	本町3丁目1827-7	個人住宅建設	100.92	10.25		遺構・遺物は検出されなかった
20	西原大塚遺跡 第　122　地　点	幸町2丁目3037、3038-1、3079の各一部	分譲住宅建設	234.36	11.22		盛土保存適用
21	中　道　遺　跡 第　64　地　点	柏町5丁目2950-9・10の各一部	個人住宅建設	118.80	12.1		盛土保存適用
22	西原大塚遺跡 第　123　地　点	幸町4丁目3391-1・12の各一部	個人住宅建設	155.20	12.16		遺構・遺物は検出されなかった
23	西原大塚遺跡 第　124　地　点	幸町3丁目3100-1の一部	個人住宅建設	150.02	12.19	H18.1.12 ～13	駐車場（29㎡）を発掘調査、建物部分盛土保存適用
24	西原大塚遺跡 第　125　地　点	幸町2丁目3080-3、3081の各一部	個人住宅建設	168.41	H18.3.9		遺構・遺物は検出されなかった
25	西原大塚遺跡 第　126　地　点	幸町2丁目3029、3038-2の一部	共同住宅建設	667.19	3.23		盛土保存適用
合　　計				5,144.44			

第２表　平成17年度調査地点一覧

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第１地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成２年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成８年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数は逆に過去最高の９件にのぼり増加したという現象が生じた。これは、平成７年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成９年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見せている。これは、平成５年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業が開始され、これに伴い発掘調査が実施されているが、工事の完了後に周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大することが予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、平成15年１月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・氷川前遺跡の２遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の８遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図ったものであった。

平成17年度は、25件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は１件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は２件であった。なお、盛土保存を適用したのは15件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅17件、分譲住宅建設３件、共同住宅建設２件、保育園建設１件共同住宅一部店舗建設１件、診療所併用住宅建設１件である。

［註］

註１　『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註２　『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）６月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

［引用文献］

神山健吉　1988「「廻回雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第２章　城山遺跡第49地点の調査

第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

城山遺跡は、志木市柏町３丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2㎞に位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約５ｍである。

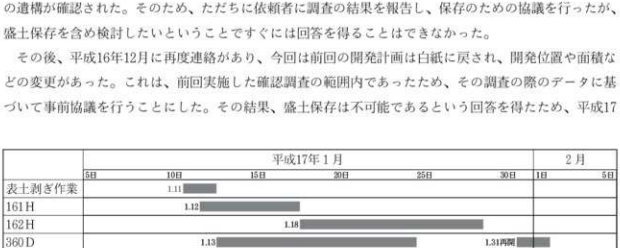
遺跡の周辺を眺めると近年では、緑地も少なくなり、畑地が僅かに残る程度となったが、小学校・中学校・神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言える。最近では、平成18・19年度の福祉施設建設に伴う第58・60地点の大規模発掘調査が実施され、さらに、住宅建設が行われていない空地にも平成19年度には第61地点のような分譲住宅建設が行われるなど、今後も畑地においても小・中規模の開発計画が増加するものと見られる。

本遺跡は、今までの調査から、旧石器時代、縄文時代草創期～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

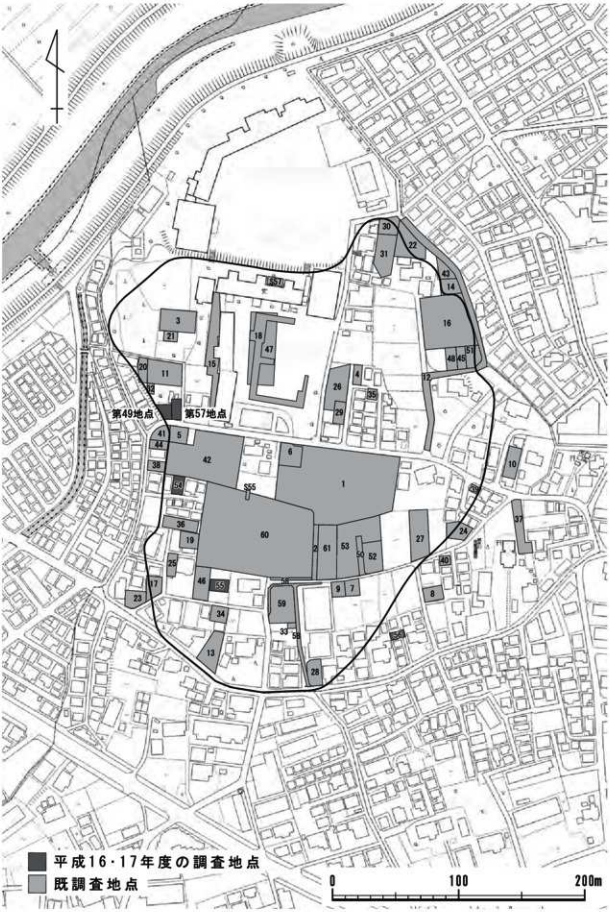
（２）発掘調査の経過

確認調査は、平成15年８月26日に実施した。調査区長軸ほぼ南北方向に２本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、道路状遺構１本と土坑２基ほどの遺構が確認された。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行ったが、盛土保存を含め検討したいということですぐには回答を得ることはできなかった。

その後、平成16年12月に再度連絡があり、今回は前回の開発計画は白紙に戻され、開発位置や面積などの変更があった。これは、前回実施した確認調査の範囲内であったため、その調査の際のデータに基づいて事前協議を行うことにした。その結果、盛土保存は不可能であるという回答を得たため、平成17



第３表　城山遺跡第49地点の発掘調査工程表



第２図　城山遺跡の調査地点（1／3000）　　平成20年６月30日現在

年１月11日から発掘調査を実施することに決定した。

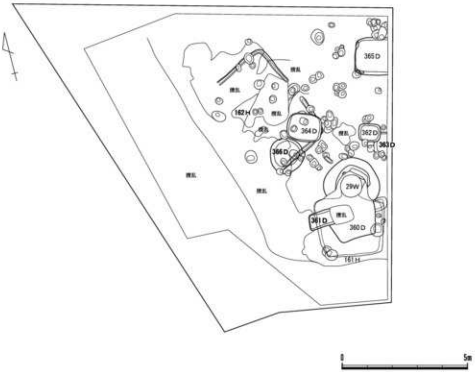
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第３表の発掘調査工程表に示した。

１月11日　重機による表土剥ぎ作業を開始する。当初は敷地内に残土置場を確保する予定であったが、新たに住居跡が検出され、残土置場の確保が難しくなったため、急きょ午後から残土をダンプに積載し、調査区外に搬出することにした。

12日　人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代の住居跡２軒、中世以降の土坑数基を検出し、さらに確認調査では道路状遺構と考えていたものであるが、一部硬化面をもつ範囲を確認した。同日には、古墳時代後期の住居跡（161Ｈ）と硬化面をもつ範囲の精査を開始する。重機による表土剥ぎ及び残土搬出作業は午前中に終了した。

１月中旬　道路状遺構と考えていた遺構であったが、掘り込みも確認できず、確信が得られなかったため、一応範囲のみを把握することに留め、遺構名は付けなかった。161Ｈは出土土器から、古墳時代後期の住居跡と判明、写真撮影・実測を行い調査を終了した。中世以降の土坑（360Ｄ）は地下室と考えられる。360Ｄは161Ｈの大部分を破壊して構築しており、161Ｈに伴う土器はカマドの粘土と共に360Ｄの主体部から崩落した状態で検出された。古墳時代後期の住居跡（162Ｈ）は西側斜面側の西半部については、全体に攪乱が著しく、破壊され不明であった。また、中世以降の土坑（361～364Ｄ）の精査を開始し、写真撮影・実測を終了した。

１月下旬　360Ｄは深く危険であるため中止していた精査を再開し、写真撮影・実測を終了した。



第３図　遺構分布図（1／150）

同時に360Ｄの竪坑部には井戸跡（29W）が重複して構築されていたため併行して精査を終了させた。162Ｈは掘り終了後、写真撮影・実測を終了した。中世以降の土坑（365Ｄ）は、坑底部に火床部をもつタイプである。坑底上からは常滑の大甕の破片が出土し、時期は16世紀後半から17世紀初頭に比定できる。

２月１日　午前中に360Ｄの半截を行い、セクション図を終了、その後完掘し、午後には写真撮影とすべての実測図を終了した。本日をもって調査を終了する。

２日　埋戻し作業を開始する。午後からは器材搬出作業を行う。

３日　埋戻し作業を完了する。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）概　要

縄文時代の遺構は、土坑１基（366Ｄ）が検出された。また縄文の遺物包含層は削平により、撹乱され、僅かに残っている程度であった。

（２）土　坑

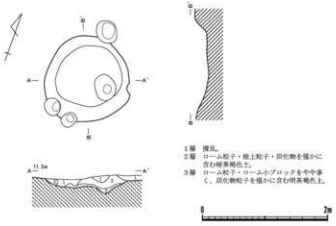
366号土坑

遺　構（第４図）

［構造］後世のピットに切られる。断面形は皿状で坑底はほぼ平坦だが、東側底面に浅い窪みを持つ。（平面形）ほぼ円形。（規模）径約140㎝。（深さ）25㎝。（覆土）２層に分層された。

［遺物］出土しなかった。

［時期］覆土の観察から縄文時代と見られるが、詳細な時期については不明である。



第４図　366号土坑（1／60）

第３節　古墳時代後期の遺構と遺物

（１）概　要

古墳時代後期の遺構は、住居跡２軒（161・162Ｈ）が検出された。しかし、２軒の住居跡は撹乱により著しく破壊されており、161Ｈについては、後世の地下室（360Ｄ）と井戸跡（29Ｗ）により、大きく破壊されている状態であった。また、カマドの粘土や土器についても360Ｄの坑内から、ブロック状に陥落した状態で出土した。

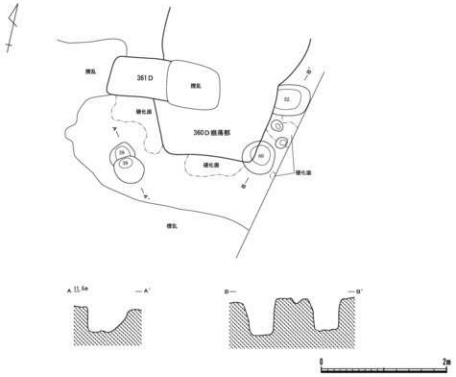
162Ｈについては、西半部が斜面地による影響で破壊され、住居内も後世の土坑やピット群により撹乱を受け、遺存状態は悪いと言える。

（２）住居跡

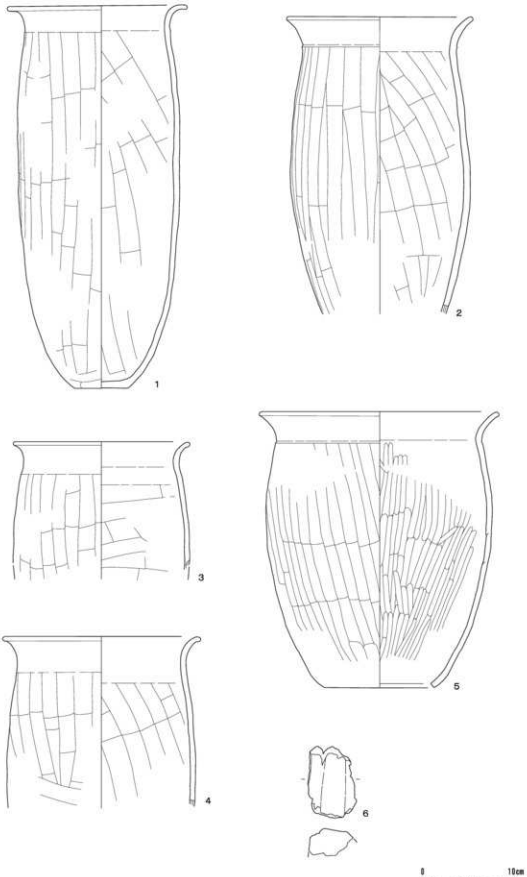
161号住居跡

遺　構（第５図）

［住居構造］360・361Ｄと撹乱によりかなりの部分が壊されていたため、詳細は不明である。（壁高）壁は確認できなかったため不明である。（床面）一部しか確認できなかったが、図示した部分が硬化していた。（カマド）確認できなかったが、360Ｄの覆土中から検出された灰白色粘土がカマドの構築に使われていたものと考えられる。（柱穴）主柱穴と思われるものは２本確認され、東側は重複形態をとっている。（貯蔵穴）西側は破壊されているが、覆土中から数多くの土器片が出土した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は不明×50㎝・深さ52㎝を測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土



第５図　161号住居跡（1／60）



第6図　161号住居跡出土遺物（1／4）

小ブロック・粘土ブロックを含む明茶褐色土を基調とする。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］土師器甕・甑形土器と支脚の破片が出土した。

［時期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

遺　物（第６図、第４表）

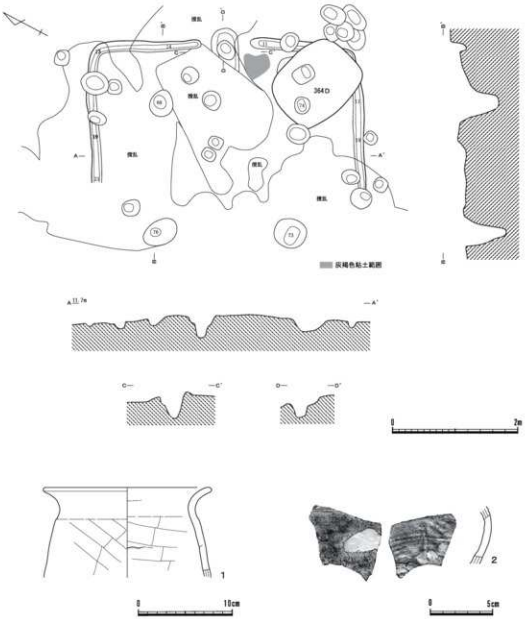
１～４は土師器甕形土器、５は土師器甑形土器である。

６は土製支脚の小破片で、現存高7.5cm・幅4.7cm。表面には成形痕と思われる平坦面が観察される。

162号住居跡

遺　構（第７図）

［住居構造］364Dと後世のピットに切られ、さらに撹乱により西半部は壊されている。（平面形）方形。



第７図　162号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3）

（規模）不明×4.40m。（壁高）一番残りの良い所で22cmを測る。（壁溝）確認できた範囲ではカマドを除き巡らされていた。上幅14～18cm・下幅６～８cm・深さ11～21cmを測る。（床面）確認できた床面は少なかったが、全体的に良く硬化していた。（カマド）北東壁のほぼ中央に位置するが、撹乱と後世のピットにより壊されている。主軸方位はＮ－64°－Ｅ。規模は幅43cm・壁への掘り込み20cmを測り、長さは不明である。燃焼部には15cm程の掘り込みが確認できた。カマドの右側から灰褐色粘土が検出されたことから、袖部は粘土で構築されていたと考えられる。（柱穴）主柱穴と思われるもの４本が検出された。深さは63～73cmを測る。（貯蔵穴）東コーナー近くにあったと思われるが、364Ｄによりほとんど壊されている。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土師器甕形土器、須恵器甕形土器の破片が出土した。

［時期］古墳時代後期（７世紀前葉か）。

遺　物（第７図、第５表）

１は土師器甕形土器、２は須恵器甕形土器である。

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器　種	器高	口径	底径	特　徴	色　調	胎　土	調　整	出土位置	遺存度
第6図1	土師器甕	40.8	19.0	5.6	長甕／口縁部は弓状を呈する／口縁部と胴部との境はスムーズ／口縁部から胴部にかけて部分的に粘土の付着痕あり／底部に木葉痕あり	明橙色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデであるが、胴部上半へ中位はていねいにヘラナデ(スリップ？)	貯蔵穴	60%
第6図2	土師器甕	(31.5)	(19.4)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は沈線状／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り、口縁部直下には指頭押捻による成形痕（指紋）あり	貯蔵穴内及び360Ｄ内の陥落土層中	口縁部～胴部下半60%
第6図3	土師器甕	(14.5)	(18.6)	－	長甕／口縁部は弓状を呈する／口縁部と胴部との境はやや段差あり／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置	暗橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(スリップか？)	貯蔵穴	口縁部～体部中位30%
第6図4	土師器甕	(18.3)	(21.0)	－	長甕／口縁部は弓状を呈する／口縁部と胴部との境はスムーズ	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(スリップか？)	貯蔵穴内及び360Ｄ内の陥落土層中	口縁部～体部中位30%
第6図5	土師器甑	24.3	(25.0)	(11.5)	口縁部は外反する／最大径は口縁部／底部は筒抜け式	暗黄褐色	砂粒を多く、白色砂粒・橙色粒子を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ後縦方向のヘラ磨き調整／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(スリップか？)	貯蔵穴	40%

第４表　161号住居跡出土土器一覧

挿図番号	器　種	器高	口径	底径	特　徴	色　調	胎　土	調　整	出土位置	遺存度
第7図1	土師器甕	(9.6)	(17.8)	－	長甕／口縁部は弓状を呈する／口縁部と胴部との境は段差あり	胎土は暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ていねいにヘラナデ（スリップか）が施される	カマド内	口縁部～体部上半20%
第7図2	須恵器甕	－	－	－	肩部にヘラ描沈線による横位沈線文が施文され、その上に櫛描波状文と思われる文様の一部が観察される／陶色製品か	暗灰褐色を基調とするが、断面はセピア色	白色砂粒を僅かに含む	ろくろ方向は不明／内面底部付近には成形時の圧痕あり／外面底部付近には細かいハケ目状の調整痕あり	覆土中	肩部～体部下半の破片

（単位：cm）

第５表　162号住居跡出土土器一覧

第４節　中世以降の遺構と遺物

（１）概　要

中世以降の遺構は、土坑（361Ｄ～365Ｄ）・地下室（360Ｄ）・井戸跡（29Ｗ）である。土坑のうち、365Ｄは市内では城山遺跡のみで検出例のある特徴的なもので、長方形を基本とし、コーナー部に火床部をもつタイプである。また、地下室の360Ｄは井戸跡の29Ｗと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

ここでの時期設定については、基本的には中世以降としたが、遺物が出土した場合は、遺物の時期をそのまま遺構の時期として取り扱うことにした。

（２）土　坑

360号土坑

遺　構（第８図）

［構造］地下室である。29Ｗと竪坑部が重なっている。新旧関係は不明であるが、井戸跡の掘り込みを竪坑部に利用した可能性もある。天井部は崩落していた。（入口竪坑部）開口部は直径2.20m程の円形に近い形で、確認面から90㎝下と165㎝下に階段状の段を有し、北側からは足掛けと思われる穴が145㎝程下から検出された。断面は漏斗状を呈するが、下の方は29Ｗと重なり直径90㎝程の円形で垂下する。深さ2.30ｍを測る。（主体部）底部平面形は台形に近い形で入口側が2.55ｍ・奥側が2.00ｍ・奥行き2.25ｍを測り、坑底面はほぼ平坦である。天井部までの高さは約1.30ｍを測る。（主軸方位）Ｎ－８°－Ｅ。（覆土）53層に分層されるが、15～18層は上層にあった161Ｈの覆土が陥落したものと思われる。

［遺物］陶磁器・土器・砥石・石臼・板碑が出土している。その他として貝殻（アカニシ）が出土している（付編参照）。

［時期］中～近世（16世紀後半～17世紀初頭）。

遺　物（第９図、図版５－１、第６表）

１は磁器、２～４は陶器、５～９は土器である。

10は砥石である。長さ5.2㎝・幅2.1㎝・厚さ2.3㎝・重さ69ｇ。

11～13は板碑の破片である。すべて石質は緑色片岩である。

11は長さ12.3㎝・幅13.4㎝・厚さ2.3㎝・重さ584ｇ。基部に近い部位で、枠線内に紀年の一部の「年」とその左側に、「○比丘尼」の文字が見られる。文字面に赤色塗料の痕跡が観察される。

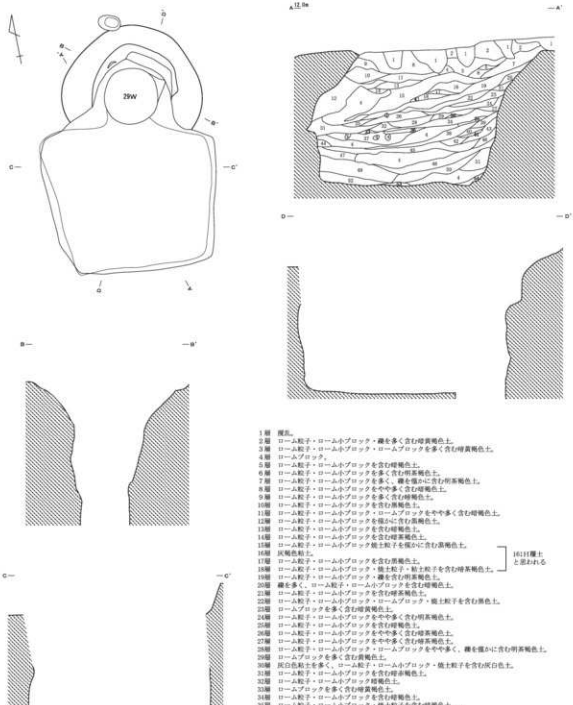
12は長さ15.6㎝・幅8.7㎝・厚さ2.3㎝・重さ372ｇ。表面上端には二条線の一部であろうか。裏面には工具痕が残る。

13は長さ22.8㎝・幅13.2㎝・厚さ2.5㎝・重さ1.1kg。枠線内に文字が刻まれているが不明である。裏面には工具痕が残る。

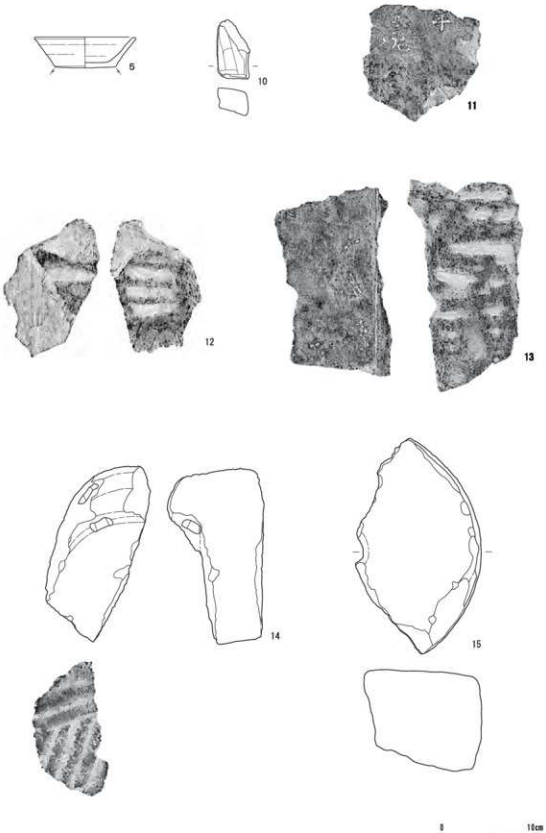
14・15は石臼の破片である。

14は高さ10.2㎝・長さ19.0㎝・幅8.5㎝・重さ1.8kg。上面には横孔が穿たれている。

15は高さ10.4㎝・推定径27.0㎝・厚さ2.5㎝・重さ4.0kg。中央に軸孔が穿たれている。



第８図　360号土坑・29号井戸跡（1／60）



第９図　360号土坑出土遺物（1／4）

361号土坑

遺　構（第10図）

［構造］161H・360Dを切る。東側は撹乱により壊されている。（平面形）長方形。（規模）不明×64㎝。（深さ）東側に向かって深くなっており55～65㎝を測る。（長軸方位）N－85°－E。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

362号土坑

遺　構（第10図）

［構造］363Dを切る。平面形は隅丸方形、壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、坑底面は平坦である。（規模）85×70㎝。（深さ）40㎝前後を測る。（長軸方位）N－75°－W。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

363号土坑

遺　構（第３図）

［構造］362Dと後世のピットに切られ、東側は調査区域外であるため詳細は不明である。（平面形）方形。（規模）不明。（深さ）34㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

364号土坑

遺　構（第10図）

［構造］162Hを切る。平面形は隅丸長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。（規模）1.35×1.13m。（深さ）52㎝。（長軸方位）N－71°－W。（覆土）８層に分層される。

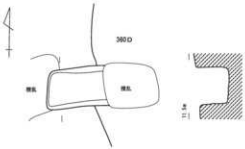
［遺物］出土しなかった。

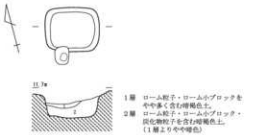
［時期］中世以降。

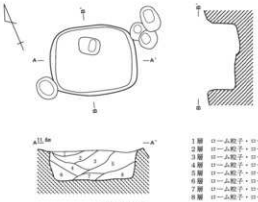
365号土坑

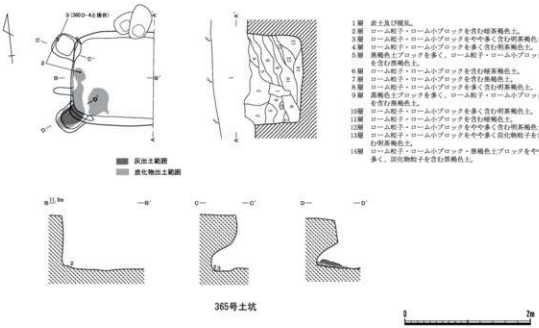
遺　構（第10図）

［構造］東側は調査区域外である。平面形は隅丸長方形と思われる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。南西と北西のコーナーに横穴状の掘り込みが確認できた。さらに西壁の坑底面から10㎝程上がった所にも細長い掘り込みがあり、中から５個の石が出土した。南西コーナー付近の床面上からは２㎝ほどの厚さで炭化物が検出された。南西の掘り込み内からは灰混じりの炭化物の上に灰赤褐色の灰が堆積した状態で検出され、奥からは石が１個出土した。北西の掘り込みからは灰褐色の灰が薄く検出され、その上から甕の破片と石２個が出土している。（規模）不明×1.08m。（深さ）87㎝を測る。


360D
撹乱
撹乱
361号土坑


362号土坑
1層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土。
2層　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土。（1層よりやや暗色）


364号土坑
1層　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。やや硬質。
8層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。


3（360D・42撹乱）
反出土範囲
炭化物出土範囲
1層　表土及び撹乱。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
5層　黒褐色土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
9層　黒褐色土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
12層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土。
13層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む炭化物粒子を含む明茶褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロック・黒褐色土ブロックをやや多く、炭化物粒子を含む黒褐色土。
365号土坑
0　2m

第10図　土坑（1／60）

（長軸方位）Ｎ－７°－Ｅ。（覆土）13層に分層される。

［遺物］陶器の破片が数点出土した。

［所見］城山遺跡第42地点でＢ群４類の火床部を有する土坑に属するものである。現時点では、市内城山遺跡内の柏の城跡内部での検出にとどまることから、柏の城関連の遺構と考えるのが妥当であろう。

［時期］中～近世（16世紀後半～17世紀初頭）。

遺　物（図版５－２、第６表）

１・２は陶器で、１は擂鉢、２は大甕である。３の大甕の破片は、360Ｄ－４と接合した。

（３）井戸跡

29号井戸跡

遺　構（第８図）

［構造］360Ｄの竪坑部と重複した形で検出されたが、新旧関係は不明である。360Ｄの竪坑坑底面では直径90㎝の円形を呈する。深さ2.30ｍの所までで、その下は危険防止のため掘り下げなかった。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

（　）内は現存値及び推定値

図版番号	遺構名	種別	器　種	法　量			製作の特徴等	推定産地	時　期
				器高	口径	底径			
図版5-1-1	360D	磁器	白磁皿	(1.2)	－	－	底部小破片／付高台	中国製	16c
図版5-1-2	360D	陶器	擂鉢	－	－	－	胴部小破片／鉄釉／8本一単位のハケ目	瀬戸	16c
図版5-1-3	360D	陶器	擂鉢	(3.0)	－	－	底部破片／鉄釉／11本以上を一単位とするハケ目	丹波	16c
図版5-1-4	360D	陶器	大甕	－	－	－	胴部破片／内外面ハケ目状の調整痕あり／365D-3と接合／365D-2と同一個体と思われる	常滑	16c後半～17c初
図版5-1-5	360D	土器	かわらけ	3.3	10.6	6.4	色調は淡茶褐色／胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む／底部は回転糸切り後、一方向からのヘラ削り調整／全体にうっすらと黒く煤けている／遺存度約60%	在地系	16c
図版5-1-6	360D	土器	かわらけ	(1.1)	－	(5.2)	底部小破片／色調は明橙色／底部に回転糸切り痕あり／白色鉄状物質を含むため、酸化炎焼成の須恵器であるかもしれない	比企系	？
図版5-1-7	360D	土器	かわらけ	(1.4)	－	－	底部小破片／底部に回転糸切り痕あり	在地系	16c
図版5-1-8	360D	土器	土鍋？	－	－	－	胴部小破片／厚さ2㎜の薄手／胎土の色調は灰白色を基調／外面は黒色／外面：ヘラ削り調整、内面：ヘラナデ	伊勢系？	？
図版5-1-9	360D	土器	甕	(5.5)	－	－	口縁部破片／口唇部平坦／焼成不良	常滑？	16c中?
図版5-2-1	365D	陶器	擂鉢	－	－	－	口縁部小破片／折り返し口縁／鉄釉	瀬戸	16c後半～17c初
図版5-2-2	365D	陶器	大甕	－	－	－	胴部破片／360D-4と同一個体と思われる	常滑	16c後半～17c初
図版5-1-4	365D	陶器	大甕	－	－	－	胴部破片（365D-3）／360D-4と接合	常滑	16c後半～17c初

（単位：cm）

第６表　土坑出土の陶磁器・土器一覧

第５節　遺構外出土遺物

ここでは、表土・撹乱中から出土した遺物、さらに遺構内からの出土ではあるが、混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱うことにする。

また、本地点では、ローム層直上の漸移層あるいは遺物包含層も、部分的に数cm程確認されたが、縄文土器の出土状況との関連性はうすい。

遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、縄文時代の土器、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器、中・近世の遺物が出土した。

（１）縄文時代の石器（第11図、第７表）

１は石鏃の未製品、２は石核、３～７は剥片、８は磨石である。これらの大部分は、360Ｄの地下室内からの出土であることを考えると、上層部に縄文時代の住居跡があった可能性も考えられる。

（２）縄文時代の土器（第12図９～27、第８表）

後世の遺構の覆土中からの混入品が多く、土量の多い360Ｄからの出土が大半であった。

土器は小破片が多く、型式のはっきりしないものが多かったが、早期前葉から中期中葉にかけてのものが出土している。城山遺跡では前期末葉の土器が多く出土する傾向があり、本地点でも同様で諸磯式土器の割合が高かったが、前期の羽状縄文系土器も目立った。

９は早期前葉の撚糸文系の土器、10～12は早期後葉の条痕文系土器である。

13～17は前期前葉の羽状縄文系土器、18～22は前期後葉の諸磯式・浮島式土器である。

23～26は中期前・中葉に比定される土器で、27は中期後葉の加曽利ＥⅠ式土器である。

（３）弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器（第12図28）

本地点からは、この時期の遺物は極めて少なかったと言える。

この遺物についても詳細は不明であるが、外面に細かいハケ目調整が施されることから、壺の破片として判断したに過ぎない。内面に肥厚する部分が観察され、特異の器形と思われ、器種・部位についても厳密には不明と言える。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラ磨き調整、外面は細かいハケ目調整が縦方向に施される。

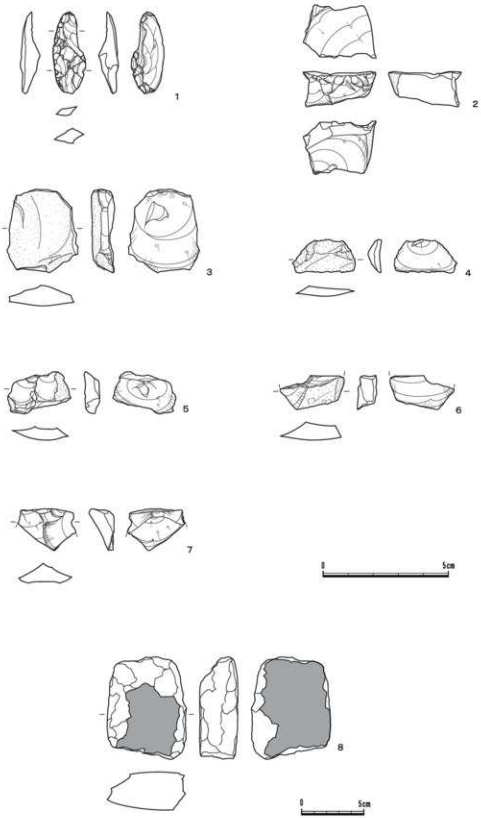
（４）中・近世の遺物（図版６－29～38、第９表）

本地点からは、中世以降の土坑・井戸跡・地下室が検出されているが、ここで取り扱った遺物は、遺構外と古墳時代後期の住居跡（162Ｈ）を中心に出土したものである。

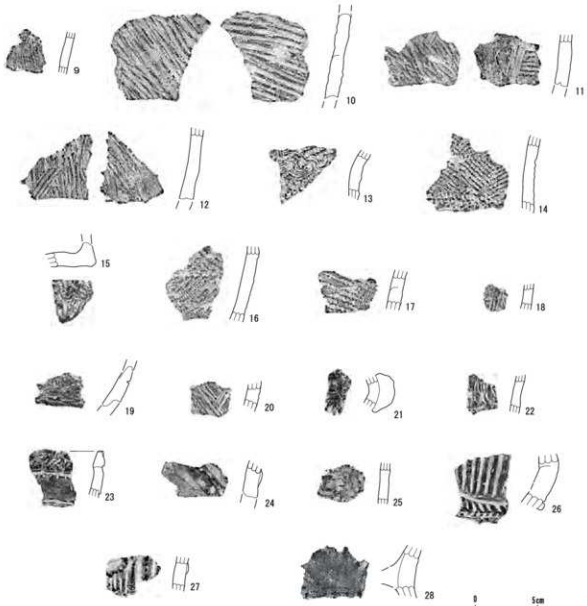
特に陶器・土器については、近・現代という新しい時期のものはなく、16世紀後半～17世紀初頭に比定できるため、これらは、おそらく「柏の城」に関連した遺物と思われる。

29～35は陶器、36・37は土器である。

38は石製品で、碁石である。径1.5cm・厚さ0.3cm・重さ1.4ｇ。162Ｈからの出土である。



第11図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3）



第12図　遺構外出土遺物２（1／3）

挿図番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	出土位置
第11図1	石鏃未製品	チャート	32.44	13.28	6.75	2.20		365D
第11図2	石　核	黒曜石	15.16	29.48	20.57	6.10	左側縁欠	360D
第11図3	剥　片	黒曜石	33.80	28.04	9.38	9.60		360D
第11図4	剥　片	黒曜石	13.28	24.70	5.15	1.20		360D
第11図5	剥　片	黒曜石	16.03	25.18	6.50	1.80		360D
第11図6	剥　片	黒曜石	14.73	25.21	8.20	2.50	上部欠	360D
第11図7	剥　片	黒曜石	17.66	22.83	8.13	2.20	下部欠	161H貯蔵穴
第11図8	磨　石	安山岩	81.15	63.17	30.33	218.20	下部欠	360D

（単位：mm・g）

第７表　遺構外出土の石器一覧

挿図番号	部位	文様・特徴など	色　調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備　考
					繊	角	礫	砂	他		
第12図9	胴	R撚糸文	褐色	撚糸文系				○	片	161H	
第12図10	胴	貝殻条痕文	褐色	条痕文系	○	○	○	○		360D	
第12図11	胴	貝殻条痕文	褐色／内面は黒色	条痕文系	○	○		○		360D	
第12図12	胴	貝殻条痕文	褐色／内面は灰褐色	条痕文系	○			○		360D	
第12図13	胴	L R縄文／環付末端／コンパス文	明褐色	関山	○			○		360D	繊維は少量
第12図14	胴	羽状縄文	明赤褐色／内面は褐色	関山	○					365D	
第12図15	底？	底面に縄文？	明褐色	関山	○					遺構外	
第12図16	胴	L R縄文／環付末端	褐色	羽状縄文系	○					360D	
第12図17	胴	R L縄文	明褐色／内面は灰褐色	羽状縄文系	○		○			360D	
第12図18	胴	L R縄文	明赤褐色	諸磯			○	○		360D	
第12図19	胴	刻みを持つ浮線文／尖った丸棒による刺突文	暗褐色	諸磯ｂ		○		○	白	遺構外	
第12図20	胴	半截竹管による沈線文	黒褐色／内面は赤褐色	諸磯ｃ				○		360D	
第12図21	胴	耳状の貼付文	明赤褐色	諸磯ｃ		○		○	白	161H	
第12図22	胴	波状貝殻文	黒色／内面は褐色	浮島				○		162H	
第12図23	口縁部	口唇部上面に刻み、外面にL R縄文／沈線文／刺突文	黒色	中期前葉				○		遺構外	
第12図24	胴	隆帯による懸垂文	褐色	阿玉台？				○	金	162H	
第12図25	胴	無文	赤褐色	阿玉台？		○	○	○	雲	365D	
第12図26	胴	隆帯上に刻み／沈線文	暗褐色／内面は黒色	勝坂				○		360D	
第12図27	胴	隆帯による懸垂文／沈線文	灰褐色	加曽利ＥＩ	○			○		162H	

※ 繊：繊維　角：角閃石・輝石　礫：細礫　砂：砂粒　片：片岩　白：白色粒子　金：金雲母　雲：雲母

第８表　遺構外出土の縄文土器一覧

（　）は現存値及び推定値

図版番号	種別	器　種	法　量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時　期
			器高	口径	底径				
図版6-29	陶器	碗	(3.0)	－	－	口縁部破片／被熱のため遺存状態不良	？	遺構外	？
図版6-30	陶器	皿	(1.4)	－	－	底部小破片／灰釉／削り出し高台	瀬戸	遺構外	17c初
図版6-31	陶器	志野皿	(0.9)	－	－	底部小破片／削り出し高台	瀬戸	162H	16c後半～17c初
図版6-32	陶器	瓶	－	－	－	口縁部小破片／灰釉／33と同一個体と思われる	瀬戸	遺構外	16c
図版6-33	陶器	瓶	(1.1)	－	－	底部小破片／外面灰釉／32と同一個体と思われる	瀬戸	162H	16c
図版6-34	陶器	擂鉢	－	－	－	胴部破片／内外面鉄釉／10本以上を一単位とするハケ目	瀬戸	162H	17c初
図版6-35	陶器	甕	－	－	－	胴部小破片	常滑	遺構外	16c後半
図版6-36	土器	焙烙	(2.0)	－	－	口縁部小破片／口唇部平坦／内外面黒色	在地系	遺構外	16c中
図版6-37	土器	焙烙	(4.4)	－	－	口縁部破片／口唇部平坦／内外面黒色	在地系	162H	16c中

（単位：cm）

第９表　遺構外出土の陶器・土器一覧

第３章　城山遺跡第57地点の調査

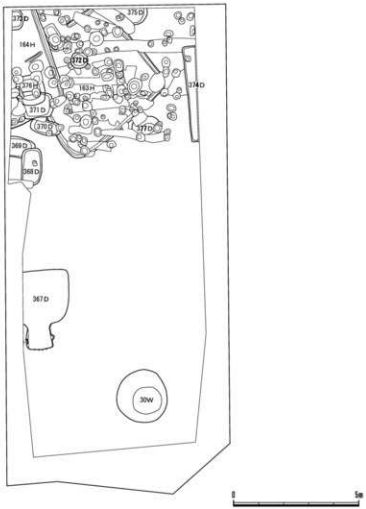
第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

第２章第１節　参照。

（２）発掘調査の経過

今回の調査地点は、平成17年１月に発掘調査を実施した第49地点の隣接地であるが、当初計画としては第49地点を含めたエリアが開発対象地であった。そのため、今回は、再度確認調査の実施はせず、平成15年８月26日に第49地点として、確認調査を実施した際のデータに基づいて事前協議を行うことにした。その結果、盛土保存は不可能であるという回答を得たため、平成17年８月29日から発掘調査を実施することに決定した。



第13図　遺構分布図（1／150）

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第10表の発掘調査工程表に示した。

8月29日　午後から重機による表土剥ぎ作業を開始する。

30日　調査区内では残土置場が確保できないと判断し、表土剥ぎに併行して、残土搬出作業を行う。

31日　引き続き表土剥ぎ及び残土搬出作業を行う。調査区南西隅からは地下室（367Ｄ）が検出された。残土置場の確保のため、ただちに精査を開始し、本日中に終了、その後写真撮影を行った。

9月１日　人員導入による発掘調査を開始する。重機による表土剥ぎ及び残土搬出作業は本日をもって終了する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代後期の住居跡２軒と中世以降の土坑数基と井戸跡１基を検出した。その後、367Ｄの実測を終了した。井戸跡（30W）は、深さ1.5ｍで掘りを中止し、写真撮影後に実測を終了した。367Ｄと30Wについては、危険防止のため、その日のうちに埋戻しを行った。

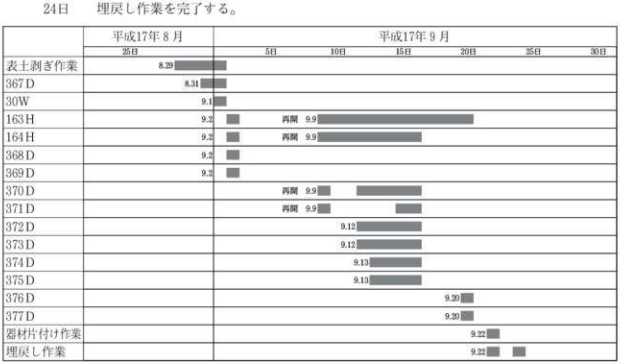
9月上旬　５～８日までは台風14号の影響により作業を中止する。９日からは調査区北西隅を中心に遺構が密集しているため、遺構確認を慎重に行いながら、各遺構の精査を開始する。古墳時代後期の住居跡は２軒（163・164Ｈ）重複しており、精査の結果、新旧関係は163Ｈが164Ｈに切られていることが判明した。

9月中旬　15日には全体写真を撮影を行う。16日には163Ｈと縄文時代の土坑２基（376・377Ｄ）を除き、写真撮影・実測は終了する。

9月20日　163Ｈの写真撮影・実測を終了、376・377Ｄを掘り始め、写真撮影・実測を終了、すべての調査を完了する。

22日　埋戻し作業を開始する。器材搬出作業及び片付けを行う。

24日　埋戻し作業を完了する。



第10表　城山遺跡第57地点の発掘調査工程表

第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）概　要

縄文時代の遺構は、早期後葉及び前期後葉の所産と思われる土坑３基（375～377Ｄ）が検出された。

（２）土　坑

375号土坑

遺　構（第14図）

［構造］調査区の北端で検出された。土坑の北側は調査区外で南西側は撹乱されており、詳細は不明である。検出部分の坑底面はほぼ平坦である。（平面形）不明。（規模）不明。（長軸方位）不明。（深さ）10㎝。（覆土）ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］縄文土器の小片が出土した。

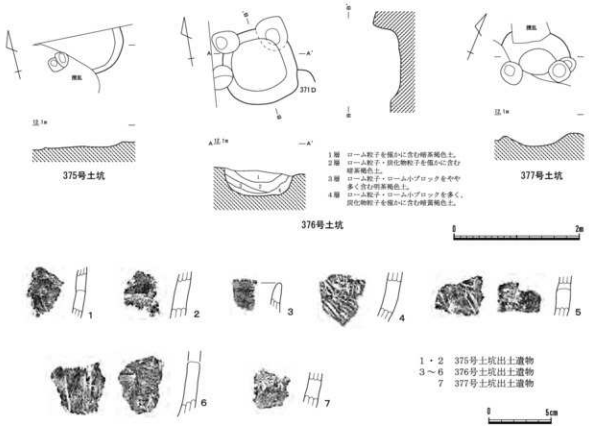
［時期］前期後葉か。

遺　物（第14図１・２）

１・２は共に無文の土器片で色調、胎土の観察から前期後葉の所産かと思われるが詳細は不明である。

376号土坑

遺　構（第14図）



第14図　土坑・出土遺物（1／60・1／3）

挿図番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色　調	時期・型式	胎土混入物					備　考
						繊	角	礫	砂	他	
第14図1	375D	胴	無文	褐色	前期後葉か？		○	○	○		
第14図2	375D	胴	無文	赤褐色	前期後葉か？		○	○	○		
第14図3	376D	口縁	無文	赤褐色	条痕文系	○			○		
第14図4	376D	胴	貝殻条痕文	褐色	条痕文系	○			○	白	
第14図5	376D	胴	貝殻条痕文／竹管による沈線	明褐色	条痕文系	○			○	白	
第14図6	376D	胴	貝殻条痕文	暗褐色	条痕文系	○			○	白	
第14図7	377D	胴	無文	褐色	条痕文系	○	○	○	○		

※繊：繊維　角：角閃石・輝石　礫：細礫　砂：砂粒　白：白色粒子

第11表　土坑出土の縄文土器一覧

［構造］調査区北西部、164Ｈの下から検出された。371Ｄ・後世のピットに切られる。（平面形）隅丸方形か。（規模）120㎝×114㎝。（長軸方位）Ｎ－15°－Ｗ（深さ）44㎝。（覆土）４層に分層された。

［遺物］早期後葉の条痕文系の土器片４点が出土した。

［時期］早期後葉。

遺　物（第14図３～６）

すべて早期の条痕文系土器の破片である。３は口縁部破片で無文。胎土には僅かに繊維と砂粒を含む。４～６は胴部の破片で、いずれも地文は貝殻条痕文が施される。胎土はすべて繊維・砂粒・白色粒子を含む。

377号土坑

遺　構（第14図）

［構造］上部は撹乱が著しい。後世のピットに切られる。（平面形）円形か。（規模）径110㎝前後。（深さ）21㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］早期後葉の条痕文系土器の小破片１点が出土した。

［時期］早期後葉。

遺　物（第14図７）

早期後葉の条痕文系土器の小破片である。無文で色調は表裏で異なり、表は褐色、裏は灰褐色を呈する。

第３節　古墳時代後期の遺構と遺物

（１）概　要

古墳時代後期の遺構は、163・164号住居跡（163・164Ｈ）の２軒に限られる。本地点の調査区内には、中世以降の土坑・ピット群が密集しており、住居跡はそれらにより著しく破壊されている状況であった。

（２）住居跡

163号住居跡

遺　構（第15図）

［住居構造］164Ｈに切られる。上層部は削られており、さらに撹乱と多数の後世のピットにより壊され、遺存状態は良くない。（平面形）正方形に近い。（規模）4.80×4.50ｍ。（壁高）残りの良いところで５㎝を測る。（壁溝）壊されていて確認できなかった部分もあるが、カマドを除いて巡らされていると思われる。164Ｈ内のものは貼床下からの検出ではっきりしないが、壁溝の可能性もあるので図示した。上幅18～24㎝・下幅６～10㎝・深さ８～15㎝を測る。（床面）確認できた部分では、カマドの前面から西半部にかけてよく硬化していた。（カマド）北壁のほぼ中央に位置するが、撹乱や後世のピットによりかなり壊されている。規模110㎝×不明・壁への掘り込み40㎝を測る。左側に袖部として馬蹄形状に残したと思われるロームの一部が確認できた。（柱穴）主柱穴と思われるものが４本検出された。深さ57～76㎝を測る。（貯蔵穴）164Ｈの貼床下から検出された。平面形は隅丸長方形で、規模は60×48㎝・深さ48㎝を測る。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］土師器坏・甑形土器、須恵器甕形土器が出土したが、１・４の土器については、撹乱による混入品の可能性がある。

［時期］古墳時代後期（６世紀前葉）。

［所見］調査区北端部には、中世以降のものと思われる遺構が分布している。特に、ピットの数はおびただしく集中して存在するため、本住居跡は、著しく撹乱を受けている。そのため、出土遺物についても一括資料としては、やや時期の符号しない遺物も含まれ、混入品も共伴する可能性がある。

遺　物（第15図、第12表）

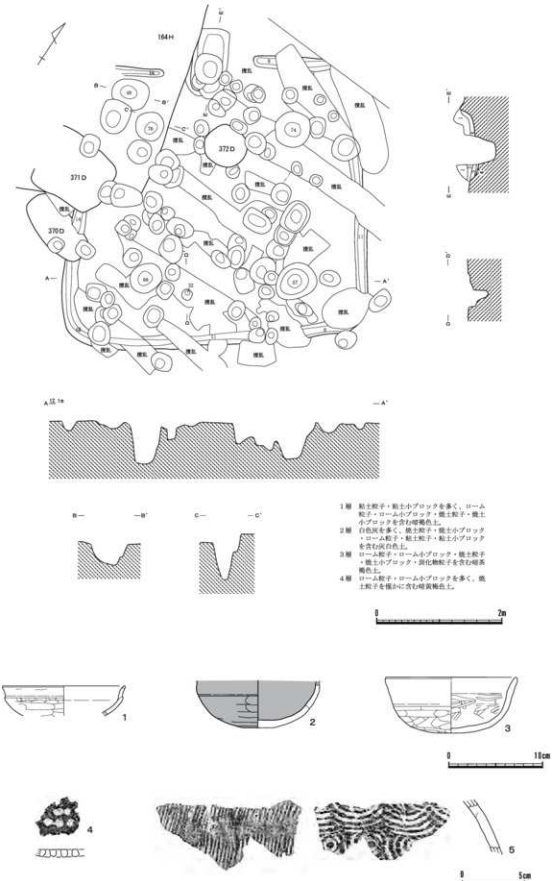
１～３は土師器坏形土器、４は土師器甑形土器、５は須恵器甕形土器である。

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器　種	器高	口径	底径	特　徴	色　調	胎　土	調　整	出土位置	遺存度
第15図1	土師器坏	(3.2)	(13.0)	－	口縁部は外反／口縁部と体部との境に有段／混入品の可能性あり	淡黄褐色	角閃石・砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ、口縁部直下に未調整部分があり、指頭押捺痕が残る	北東コーナの柱穴内	口縁部～体部下半20%
第15図2	土師器坏	(5.0)	－	3.8	口縁部と体部の境には横ナデによる弱い沒線がまわる／底部は平底風で木葉痕が僅かに残るか／内外面は赤彩	胎土は暗茶褐色	砂粒を多く含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	覆土中	40%
第15図3	土師器坏	5.9	(14.0)	－	深身の椀タイプ／口縁部は外傾／口縁部と底部の境には横ナデによる弱い沒線がまわる	暗茶褐色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ、以下ヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ	覆土中	50%弱
第15図4	土師器甑	－	－	－	多孔式の甑の底部穿孔部分／穿孔は外面方向から穿たれ、途中のものも見られる／混入品の可能性あり	暗橙色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	覆土中	底部小破片
第15図5	須恵器甕	－	－	－	胴部	暗灰褐色	白色砂粒を多く、小石を僅かに含む	内面：当て道具痕（青海波）／外面：平行叩き目痕	覆土中	胴部破片

（単位：㎝）

第12表　163号住居跡出土土器一覧



第15図　163号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3）

164号住居跡

遺　構（第16図）

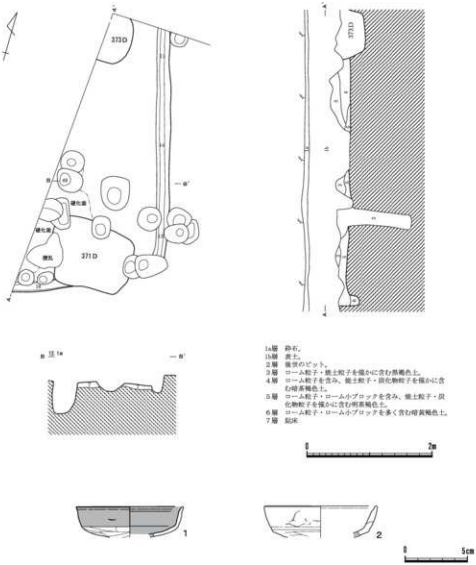
［住居構造］163Ｈを切り、371・373Ｄに切られる。住居北側と西側は調査区域外であり、南東コーナーから東壁にかけてのみの検出である。（平面形）方形。（規模）不明。（壁高）14～26㎝を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では巡らされていた。上幅16～26㎝・下幅６～10㎝・深さ11～18㎝を測る。（床面）図示した部分が硬化していた。貼床は壁に近い部分では８㎝程の厚さで施されていたが、内側はほぼ直床である。（柱穴）主柱穴と思われる深さ49㎝のものが１本検出された。（覆土）４層に分層された。

［遺物］土師器坏形土器が２点出土した。

［時期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

遺　物（第16図、第13表）

１・２は土師器坏形土器である。



第16図　164号住居跡・出土遺物（1／60・1／4）

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器　種	器高	口径	底径	特　徴	色　調	胎　土	調　整	出土位置	遺存度
第16図1	土師器 坏	(3.4)	(11.4)	－	入間系土師器／口縁部と底部との境に棱／口唇部内面には沈線がまわる／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は暗赤褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部横ナデ、底部へラナデ／外面：口縁部横ナデ、底部へラ削り	覆土中	30%
第16図2	土師器 坏	(3.3)	(12.0)	－	口縁部は外傾／口縁部と底部のと境に有段／口唇部内面直下やや深み／口縁部途中に輪積み痕あり	淡黄褐色	金雲母・砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、底部へラ削り	覆土中	口縁部から底部にかけての破片

（単位：cm）

第13表　164号住居跡出土土器一覧

第４節　中世以降の遺構と遺物

（１）概　要

中世以降の遺構は、土坑６基（368～371・373・374Ｄ）・土坑墓１基（372Ｄ）・地下室１基（367Ｄ）・井戸跡（30Ｗ）が検出された。372Ｄは時期を比定できる遺物はなかったが、人骨片を出土したことから土坑墓と考えられる。367Ｄは地下室であるが、時期を比定できる遺物は出土しなかった。

また、調査区北半部を中心に検出された多くのピットは、中世以降の所産のものと思われる。

（２）土　坑

367号土坑

遺　構（第17図）

［構造］入口竪坑部と主体部１基で構成されている地下室である。天井部は崩落していた。西側が調査区域外であり、途中まで掘り進んだところで、危険防止のため調査を中止した。入口竪坑部の開口部は長方形を呈し、規模は105×80cmで主軸に対し横長の形態をもつ。坑底については、調査できなかったため不明である。主体部は、確認面より2.60m程中央部を重機で掘り下げたが、坑底面は確認できなかった。（主軸方位）Ｎ－７°－Ｗ。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

368号土坑

遺　構（第17図）

［構造］369Ｄを切る。南壁は撹乱により壊されている。坑底面はやや凸凹している。（平面形）隅丸長方形。（規模）145×80cm。（深さ）12cm。（長軸方位）Ｎ－10°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

369号土坑

遺　構（第17図）

［構造］368Ｄに切られ、西側は調査区域外である。坑底面は平坦である。（平面形）楕円形か。（規模）不明×82㎝。（深さ）30㎝。（長軸方位）Ｎ－74°－Ｗ。（覆土）４層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

370号土坑

遺　構（第17図）

［構造］164Ｈを切る。撹乱により一部壊されている。坑底面は平坦である。（平面形）楕円形。（規模）123×63㎝。（深さ）17㎝。（長軸方位）Ｎ－75°－Ｗ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

371号土坑

遺　構（第17図）

［構造］163・164Ｈ・376Ｄを切り、撹乱と後世のピットに切られる。坑底面は比較的平坦である。（平面形）隅丸方形。（規模）130×106㎝。（深さ）42㎝。（長軸方位）Ｎ－82°－Ｗ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

372号土坑

遺　構（第17図）

［構造］163Ｈを切り、後世のピットに切られる。坑底面は平坦である。（平面形）円形に近い。（規模）68×64㎝。（深さ）42㎝。（覆土）ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材・灰を含む黒褐色土を基調とする。坑底に10㎝程の厚さでロームが充填されていた。

［遺物］骨片が出土している（付編参照）。

［時期］中世以降か。

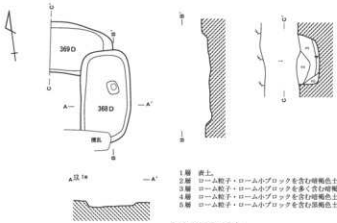
［所見］骨片は保存状態が悪く、人骨であるかは同定できなかったが、本遺構は土坑墓と考えられる。

373号土坑

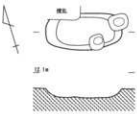
遺　構（第17図）

［構造］164Ｈを切る。北側と西側が調査区域外であるため詳細は不明である。坑底面は平坦である。（平面形）隅丸方形か？（規模）不明。（深さ）164Ｈの床面からの深さは20㎝を測る。（覆土）４層に分層される。

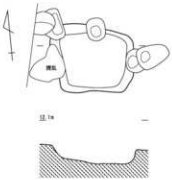
［遺物］出土しなかった。



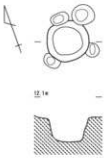
368・369号土坑



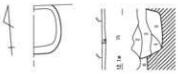
370号土坑



371号土坑

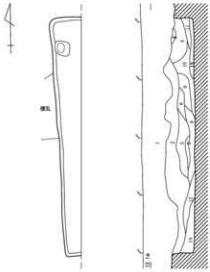


372号土坑



1a層　鉄石。
1b層　表土。
2層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
3層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
6層　16411窯土。

373号土坑



374号土坑

1層　表土。
2層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む明黒褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗黄褐色土。
12層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
13層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。

第17図　土坑（1／60）

［時期］中世以降か。

374号土坑

遺　構（第17図）

［構造］東側は調査区域外である。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、坑底は平坦である。（平面形）長方形か。（規模）不明×3.75cm。（深さ）40cm前後を測る。（覆土）13層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降か。

（３）井戸跡

30号井戸跡

遺　構（第18図）

［構造］平面形は円形を呈する。開口部径は約2.00mを測る。下方に向かうにつれて、中心が東に偏っている。深さ1.50mの径は1.10mを測る。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

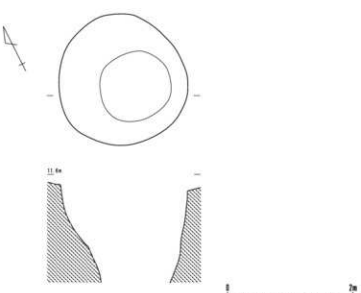
［所見］危険防止のため、1.50m程掘り下げたところで調査は中止した。

（４）ピット

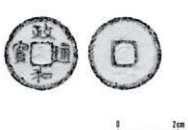
調査区北半部を中心に多くのピットが検出された。これらの大部分は、時期等の詳細は不明であるが、ここでは、２本のピット（Ｐ１・Ｐ２）から出土した遺物について説明する（第19図、図版10－４）。

Ｐ１からは、図版10－４の銅銭（政和通宝　初鋳1111年）が１点出土した。

Ｐ２からは、図版10－４の陶器が１点出土した。瀬戸の灰釉皿の口縁部小破片である。時期は16世紀。



第18図　30号井戸跡（1／60）



第19図　１号ピット出土遺物（4／5）

第５節　遺構外出土遺物

ここでは、表土・撹乱中から出土した遺物、さらに遺構内からの出土ではあるが、混入品と思われる遺物などを遺構外出土遺物として扱うことにする。遺構外出土遺物としては、縄文時代の土器、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器、平安時代の遺物、中近世の遺物が出土した。

（１）縄文時代の土器（第20図１～24、第14表）

縄文時代の土器は、すべて後世の遺構・撹乱の覆土中からの出土であった。時期については、早期後葉から後期にまでおよぶ広範なものであった。

１～３は早期後葉の条痕文系土器である。

４～７は前期前半の羽状縄文系土器、８～13は前期後半の諸磯式土器と考えられるが、11は貼付文の脇に僅かに棒状工具で押さえ付けた様な痕があり、曽利式の可能性もある。

14・15は中期初頭の五領ヶ台式土器である。16～19は中期中葉の阿玉台式土器、20は中期後葉の加曽利Ｅ式土器である。

21～24は後期の土器で、22～24は粗製土器である。

（２）弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器（第20図25・26）

甕形土器２点が出土した。

25は口縁部小破片で、口唇部外面には刻みが施される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む。内外面ハケ目調整が施される。26は胴部小破片で、色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

（３）平安時代の遺物（図版11－27・28）

須恵器２点が出土した。

27は坏形土器の口縁部小破片である。色調は灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。

28は長頸瓶の底部破片であろうか。現器高2.7㎝・推定底径7.7㎝。高台付。色調は灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。

（４）中世以降の遺物（第20図39・40・43・44、図版11－29～45、第15表）

29は磁器、30～35は陶器、36～38は土器である。

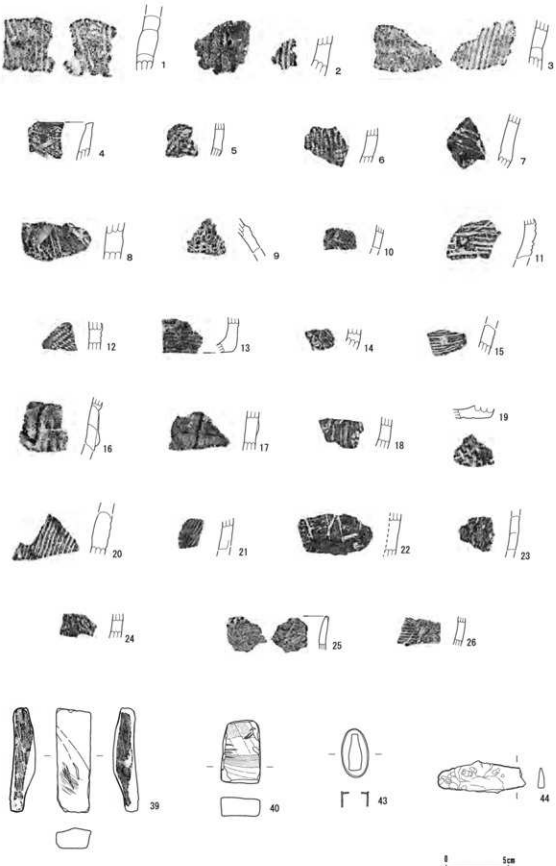
39・40は砥石である。39は長さ8.1㎝・幅2.7㎝・厚さ1.6㎝・重さ50.0ｇ。40は長さ4.9㎝・幅3.1㎝・厚さ1.5㎝・重さ38.2ｇ。

41・42は板碑である。41は長さ8.2㎝・幅4.0㎝・厚さ1.2㎝・重さ53ｇ。42は長さ5.3㎝・幅4.1㎝・厚さ0.8㎝・重さ33.2ｇ。いずれも石質は緑色片岩で163Ｈからの出土である

43は銅製品で、刀装具である。長さ3.7㎝・幅2.2㎝・高さ1.3㎝・厚さ0.1㎝以下・重さ0.93ｇ。

44は鉄製品で、火打金である。長さ6.9㎝・幅1.6㎝・厚さ0.5㎝・重さ16.0ｇ。

45は皇宋通宝（初鋳　1039年）である。遺存状態が悪いために拓本はとれなかった。



第20図　遺構外出土遺物（1／3）

挿図番号	部位	文様・特徴など	色　調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備　考
					礫	角	礫	砂	他		
第20図１	胴	貝殻条痕文	褐色	条痕文系	○	○	○	○		163H	
第20図２	胴	貝殻条痕文	暗褐色	条痕文系	○			○		163H	
第20図３	胴	貝殻条痕文	黒褐色	条痕文系	○	○		○		164H	
第20図４	口縁	ＲＬ縄文／口唇部を平坦に面取り	灰褐色	羽状縄文系	○			○		163H	
第20図５	胴	ＬＲ縄文／隆付末端	明褐色	羽状縄文系	○					374D	
第20図６	胴	羽状縄文	明褐色	羽状縄文系	○					164H	
第20図７	胴	無文／線状の繊維痕	明褐色	羽状縄文系？	○			○		163H	
第20図８	胴	半截竹管による沈線文	明赤褐色	諸磯ｃ				○		164H	
第20図９	胴	半截竹管による沈線文／結節状に押捺された貼付文	褐色	諸磯ｃ				○		370D	
第20図10	胴	半截竹管による沈線文	褐色	諸磯ｃ				○		370D	
第20図11	胴	半截竹管による横位沈線文／貼付文	暗褐色	諸磯ｃ			○	○		164H	
第20図12	胴	ＲＬ縄文	褐色	諸磯			○	○	白	163H	
第20図13	底	無文／平底	灰褐色	諸磯				○	白	163H	
第20図14	胴	ＬＲ縄文／結節文	暗褐色	五領ヶ台			○	○	英	163H	
第20図15	胴	集合沈線	暗灰褐色	五領ヶ台				○	金	164H	
第20図16	胴	隆帯／襞状の指頭圧痕文	暗褐色	阿玉台			○	○	金	370D	
第20図17	胴	隆帯／襞状の指頭圧痕文	暗褐色	阿玉台			○	○		371D	
第20図18	胴	Ｒ撚糸	暗灰褐色	阿玉台		○	○	○	金・英	164H	
第20図19	底	網代痕	赤褐色	阿玉台				○		164H	
第20図20	胴	Ｒ撚糸／沈線	明褐色	加曽利Ｅ				○		163H	
第20図21	胴	ＲＬ縄文	明褐色	後期				○		373D	
第20図22	胴	沈線による直線文／内面剥離	褐色	後期粗製土器			○	○		163H	
第20図23	胴	Ｌ撚糸	灰褐色	後期粗製土器				○	褐	163H	内面明褐色
第20図24	胴	ＬＲ縄文	暗灰褐色	後期粗製土器				○		163H	

中礫：礫礫　角：角閃石・輝石　礫：細礫　砂：砂粒　白：白色粒子　英：石英　金：金雲母　褐：褐色粒子

第14表　遺構外出土の縄文土器一覧

（　）は現存値及び推定値

図版番号	種別	器　種	法　量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時　期
			器高	口径	底径				
図版11-29	磁器	猪口	(3.5)	－	－	口縁部小破片／染付／外面一部文様、草花文か風景文／内面圏線文	肥前系	163H	18c代
図版11-30	陶器	小碗	(1.5)	－	－	底部小破片／外面底部を除き鉄薬／口縁部加工のため、再利用品と考えられる	瀬戸	163H	15c後半
図版11-31	陶器	天目茶碗	5.3	(11.8)	－	口縁部は短く外反／外面底部を除き鉄釉／口縁部～体部下半約30%遺存	美濃	164H	15c後半
図版11-32	陶器	志野皿	2.5	(13.0)	(6.6)	内面鉄絵／重ね焼き痕あり／遺存度約40%	瀬戸	163H	16c後半～17c初
図版11-33	陶器	掛分碗	－	－	－	口縁部小破片／上半：灰釉、下半：鉄釉	瀬戸	163H	18c中
図版11-34	陶器	鉢	－	－	－	体部下半小破片／灰釉	瀬戸	163H	19c
図版11-35	陶器	大甕	－	－	－	肩部破片	常滑	163H	15c後半
図版11-36	土器	かわらけ	(1.2)	－	6.0	底部破片／底部に回転糸切り痕あり	在地系	163H	15c後半～16c初
図版11-37	土器	かわらけ	2.7	－	(6.0)	底部に回転糸切り痕あり／遺存度約10%	在地系	163H	15c後半～16c初
図版11-38	土器	焙烙	(2.3)	－	－	底部小破片	在地系	163H	近世

（単位：cm）

第15表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第４章　西原大塚遺跡第113地点の調査

第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町３丁目を中心に存在する遺跡で、東武東上線志木駅の１㎞程西方に位置している。本遺跡は、北東－南西方向に約700m、北西－南東方向に約150mほどの広がりをもち、面積約164,000㎡ を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は南端で約19m、北端で約14mを測る。崖線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成５年度以降、この地域内で西原特定土地区画整理事業が本格的に開始されており、これに伴う道路部分の発掘調査が急ピッチに遂行されてきた。そして、この事業に伴う発掘調査は、平成18年度に完了したと言えるが、今後、道路の完成に付随して個人住宅・共同住宅建設などの小・中規模開発が急増することが予想される。

本遺跡は、昭和48年に第１回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

（２）発掘調査の経過

確認調査は、平成17年１月21日に実施した。調査区長軸ほぼ東西方向に２本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、中世以降と思われる土坑２基を確認した。そのうち、１基は地下式坑の可能性がある。

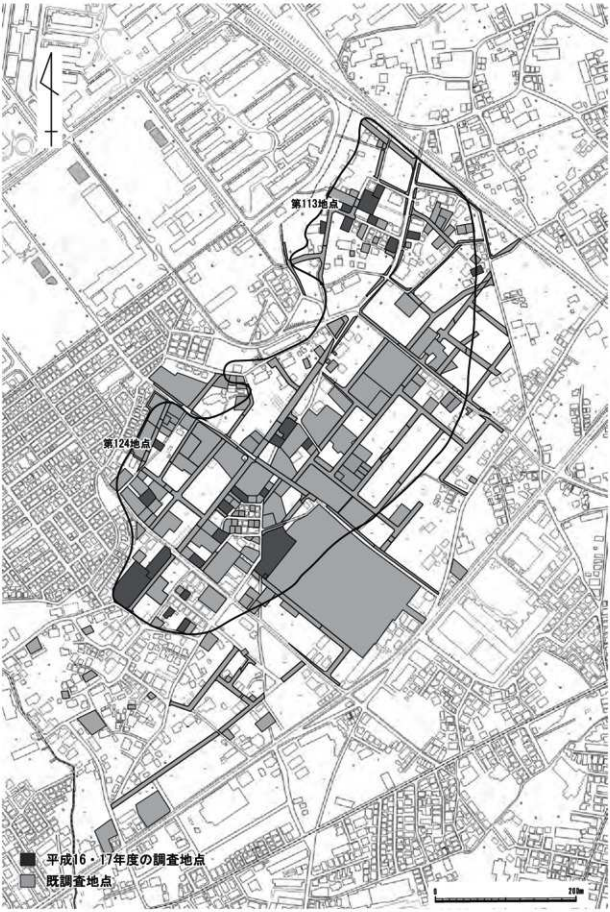
そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、地下室建設の計画があり、当初計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

以下に発掘調査の経過を説明することにする。

２月４日　重機による表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。今回の調査では、残土置場を調査区内に確保できないため、当初から残土搬出作業を行うこととした。また、調査区北側には住宅が建ち並んでいるため、防塵用のネット張りを行うこととし、本日中にその作業を終了した。

７日　人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区全面には市内では城山遺跡を中心に検出例がある溝状の土坑がかなり密集して分布していることが判明した。その後、調査区東半部に存在する土坑から精査を開始する。本日中には480～493号土坑（480～493Ｄ）を掘り始め、そのうち480～482Ｄは、完掘後、写真撮影を行った。

９・10日　483～493Ｄの精査・実測・写真撮影を終了し、調査区東半部に位置する遺構の平板測量



第21図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5000）　　平成20年６月30日　現在

を行った。その後、調査区西半部の遺構確認を再度行い、ピットと撹乱抜き作業を行う。

14日　494・447Dの精査を開始し、実測・写真撮影を終了する。447Dについては、全容を把握できなかったが、調査区南側の道路部分がすでに西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、その際に検出された地下室と同一遺構と考えられる。また、炉穴（15ＦＰ）の精査を開始し、その後、実測・写真撮影を終了した。以上をもってすべての精査を完了する。

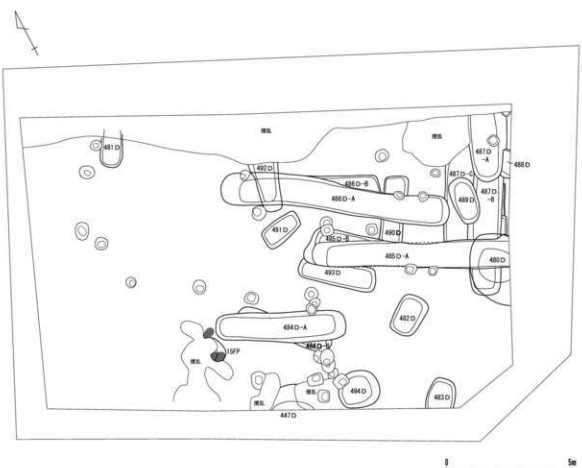
15日　器材搬出作業を行い、片付けを終了する。併行して、埋戻し作業を完了する。

第２節　検出された遺構と遺物

（１）概　要

本地点からは、縄文時代の炉穴１基と中世以降の土坑16基が検出された。縄文時代の炉穴は、出土土器から縄文時代早期末葉の所産のものと考えられる。

中世以降の土坑は、481・484～487・490・492・493Dが溝状の形態をもつ土坑である。同様の土坑は、市内では城山遺跡から多く検出されているが、本遺跡からの検出は初めてである。



第22図　遺構分布図（1／150）

また、447Ｄは南側調査区外に延びており、全容を把握できなかったが、本調査区南側の道路部分の発掘調査（西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査）において検出された地下室と同一遺構と考えられるため、同一遺構として取り扱った。

（２）縄文時代の遺構・遺物

15号炉穴

遺　構（第23図）

［構造］燃焼部は２カ所（南側を燃焼部Ａ、北側をＢとする）確認できたが、燃焼部の新旧関係は不明。遺構上部は削平され、燃焼部Ｂは確認面で炉床面が露出していたため、以下は燃焼部Ａについて記す。（平面形）撹乱が著しく不明。（規模）不明。（深さ）10㎝。（覆土）焼土粒子を多く含む暗赤褐色土。

［遺物］覆土中より土器片が出土した。

［時期］早期末葉。

遺　物（第23図）

１・２ともに早期末葉の条痕文系の土器片で貝殻条痕文を持つ。胎土には繊維・砂粒・細礫を含む。色調は１が赤褐色、２が明褐色を呈する。

（３）中世以降の遺構・遺物

447号土坑

遺　構（第24図）

［構造］地下室の可能性がある。調査区南側の発掘調査で確認された447Ｄと同一の遺構として扱った。入口竪坑部と思われるが、大部分が調査区域外であり、撹乱にも壊されているため詳細は不明である。開口部は円形に近いと思われ、緩やかに下がっていたが深さ75㎝までしか確認できなかった。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

480号土坑

遺　構（第24図）

［構造］485・487Ｄを切る。東側は調査区域外である。壁面は上方に向かって緩やかに広がっている。

第23図　15号炉穴・出土遺物（1／60・1／3）

（平面形）不整円形か。（規模）広い部分で166㎝を測る。（深さ）41㎝。（覆土）４層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

481号土坑

遺　構（第24図）

［構造］北東側は攪乱により壊されている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×53㎝。（深さ）35㎝。（長軸方位）Ｎ－29°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

482号土坑

遺　構（第24図）

［構造］壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。（平面形）隅丸長方形。（規模）100×67㎝。（深さ）28㎝。（長軸方位）Ｎ－54°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

483号土坑

遺　構（第24図）

［構造］南側は調査区域外である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×66㎝。（深さ）24㎝。（長軸方位）Ｎ－40°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］焙烙の小破片が出土したが図示できなかった。

［時期］中世（16世紀）か。

遺　物（図版14－１、第17表）

土器で、焙烙の破片である。

484号土坑

遺　構（第24図）

［構造］２基が重複した形態である。深い方をＡ・浅い方をＢとする。平面形はＡ・Ｂ共に隅丸長方形である。（Ａ）規模3.08×0.70ｍ。壁面は東側以外がほぼ垂直に立ち上がっており、坑底は平坦であるが、深さは34～41㎝で東側が深くなっている。長軸方位はＮ－62°－Ｗ。（Ｂ）Ａとの新旧関係は不明であるが、Ａより浅いためほとんど確認できなかった。規模2.30×不明ｍ。深さ32㎝。長軸方位はＮ－42°－Ｗ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

485号土坑

遺　構（第24図）

［構造］480Ｄに切られ、東側は調査区域外である。西側は２基が重複した形態である。深い方をＡ・浅い方をＢとする。（Ａ）平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の確認できた長さは4.90ｍで幅68㎝を測る。長軸の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、坑底は平坦である。東側が深くなっており、深さ55～59㎝を測る。長軸方位はＮ－63°－Ｗ。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。（Ｂ）詳細は不明であるが、坑底は平坦で深さ48㎝を測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

486号土坑

遺　構（第24図）

［構造］490・492Ｄを切る。２基が重複した形態である。深い方をＡ・浅い方をＢとする。ＡはＢに切られている。（Ａ）平面形は若干カーブを持つ隅丸長方形を呈し、規模は5.45×0.70ｍを測る。壁面は長軸側はほぼ垂直に、短軸側は緩やかに立ち上がっている。坑底は平坦で深さ50㎝を測る。長軸方位はＮ－56°－Ｗ。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。（Ｂ）平面形は長方形であると思われる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。深さ22㎝を測る。長軸方位はＮ－67°－Ｗ。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

487号土坑

遺　構（第25図）

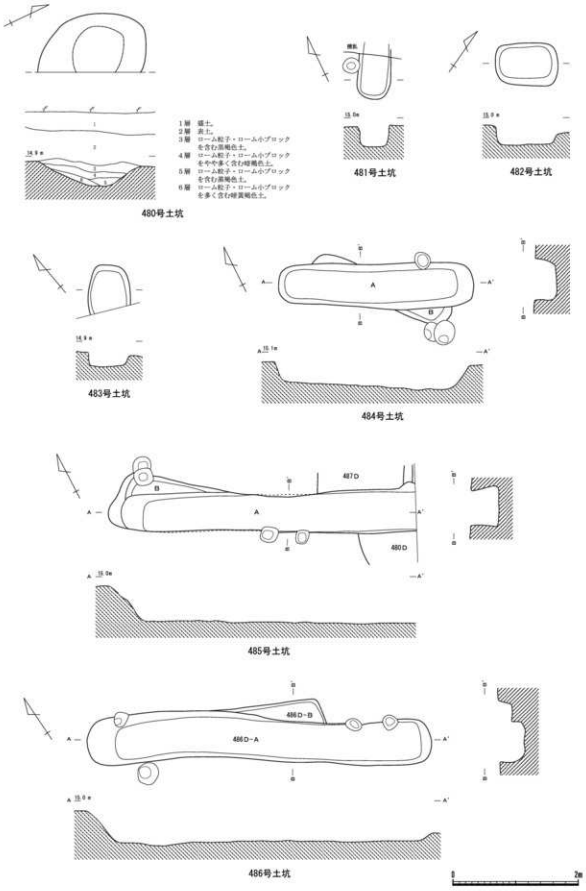
［構造］489Ｄに切られ、北側は調査区域外である。長軸方位がほぼ等しい３基が重複していると思われる。深い方からＡ・Ｂ・Ｃとする。（Ａ）北側は不明であるが、平面形は楕円形と思われる。壁面は緩やかに立ち上がり、坑底面は平坦である。確認できた長さは1.60ｍで、幅90㎝・深さ40㎝を測る。（Ｂ）平面形は長方形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。確認できた長さは約３ｍで、幅70～80㎝・深さ29㎝を測る。Ａ・Ｂの覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。（Ｃ）詳細は不明であるが、確認できた長さは2.20ｍ、坑底は平坦で深さ21㎝を測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土を基調とする。（長軸方位）Ｎ－30°－Ｅ。

［遺物］陶器の破片１点が出土した。

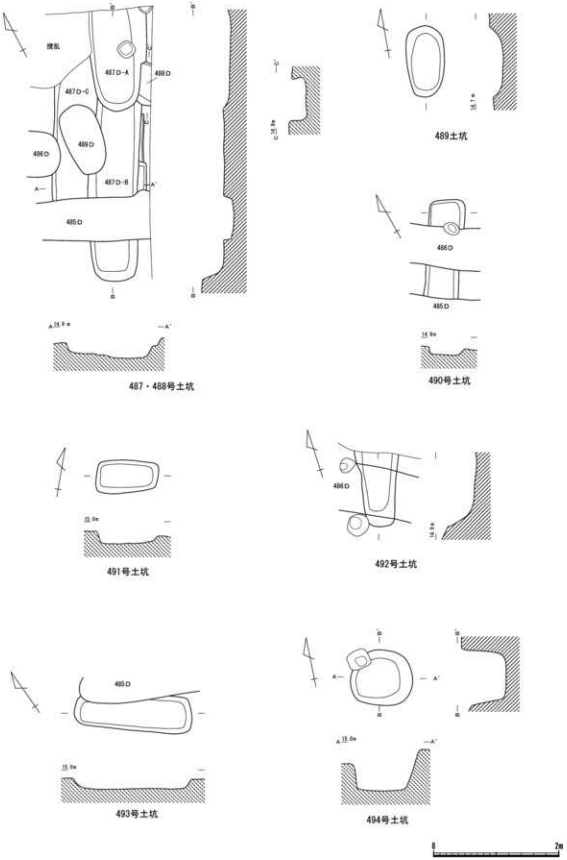
［時期］中世（15世紀後半）か。

遺　物（図版14－１、第16表）

陶器で、天目茶碗である。


1層　盛土。
2層　表土。
3層　ローム粒子・ロームホブロックを含む黒褐色土。
4層　ローム粒子・ロームホブロックをやや多く含む暗褐色土。
5層　ローム粒子・ロームホブロックを含む黒褐色土。
6層　ローム粒子・ロームホブロックを多く含む暗黄褐色土。
480号土坑
481号土坑
482号土坑
483号土坑
484号土坑
485号土坑
486号土坑
487D
480D
486D－B
486D－A
0
2m

第24図　土坑１（1／60）


撹乱
487D-A
488D
487D-C
489D
486D
487D-B
485D
A
A'
487・488号土坑
489土坑
486D
485D
490号土坑
491号土坑
486D
492号土坑
485D
493号土坑
494号土坑
0
2m

第25図　土坑２（1／60）

488号土坑

遺　構（第25図）

［構造］ごく一部しか確認できなかったため詳細は不明である。（深さ）29㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］銅銭１点が出土した。

［時期］中世以降。

遺　物（図版14－1）

政和通宝（初鋳　1111年）である。遺存状態が不良であるため、拓本はとれなかった。

489号土坑

遺　構（第25図）

［構造］487Ｄを切る。（平面形）楕円形。（規模）112×60㎝。（深さ）487Ｄの坑底面からの深さ24㎝を測る。（長軸方位）Ｎ－10°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

490号土坑

遺　構（第25図）

［構造］485・486Ｄに切られる。（平面形）長方形。（規模）確認できた長さは130㎝、幅60㎝を測る。（深さ）南西側が深く、14～20㎝を測る。（長軸方位）Ｎ－32°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

491号土坑

遺　構（第25図）

［構造］（平面形）長方形。（規模）100×52㎝。（深さ）20㎝。（長軸方位）Ｎ－78°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなっかった。

（　）内は現存値

図版番号	遺構名	種別	器　種	法　量			製作の特徴等	推定生産	時　期
				器高	口径	底径			
図版14-1	483D	土器	焙烙？	－	－	－	体部破片／内面灰色、外面黒色	在地系	16c
図版14-1	487D	陶器	天目茶碗	－	－	－	体部下半小破片／外面底部を除き鉄釉	美濃	15c後半
図版14-1	494D	土器	焙烙	(3.0)	－	－	底部破片／断面サンドイッチ状／外面ヘラ削り	在地系	16c

（単位：cm）

第16表　土坑出土の陶器・土器一覧

［時期］中世以降。

492号土坑

遺　構（第25図）

［構造］486Ｄに切られ、北側は撹乱である。壁面は緩やかに立ち上がっており、坑底はほぼ平坦である。（平面形）長方形か。（規模）不明×70㎝。（深さ）54㎝。（長軸方位）Ｎ－19°－Ｅ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

493号土坑

遺　構（第25図）

［構造］485Ｄに切られる。壁面は急斜に立ち上がり、坑底は平坦である。（平面形）隅丸長方形。（規模）186×60㎝。（深さ）16㎝。（長軸方位）Ｎ－50°－Ｗ。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］中世以降。

494号土坑

遺　構（第25図）

［構造］（平面形）隅丸方形。（規模）95×84㎝。（深さ）71㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］焙烙の破片が出土したが図示できなかった。

［時期］中世（16世紀）か。

遺　物（図版14－１、第16表）

土器で、焙烙である。

（４）遺構外出土遺物

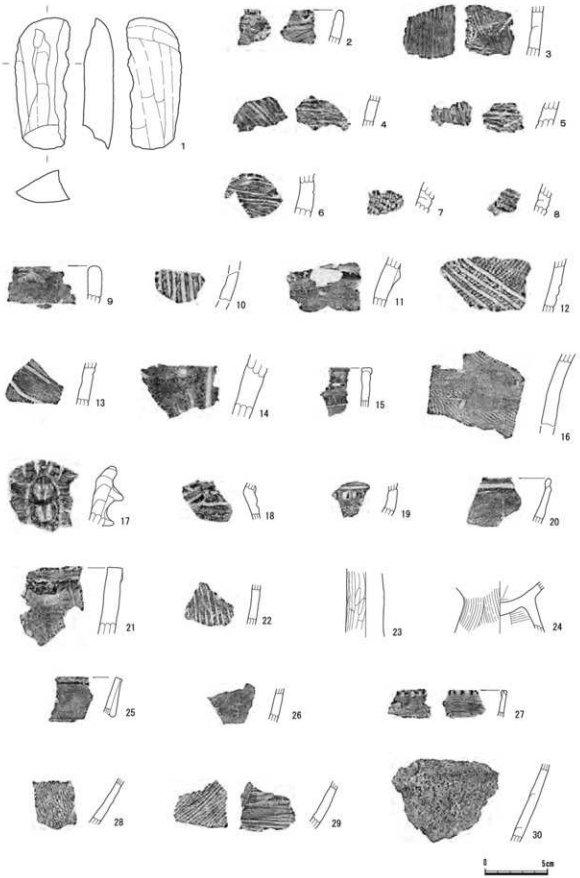
ここでは、表土・撹乱中から出土した遺物、遺構内からの出土ではあるが時代的に遺構に伴わない混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱うことにする。遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器・土器、弥生時代末葉～古墳時代前期の土器、中世以降の陶磁器・土器が出土した。

１．縄文時代の石器（第26図１）

用途不明の石器であるが、表面に擦痕が観察されることから、砥石か磨石であろう。長さ10.4㎝・幅4.3㎝・厚さ2.3㎝・重さ130.0ｇ。石質は砂岩である。480Ｄからの出土である。

２．縄文時代の土器（第26図２～22、第17表）

縄文時代の遺物の多くは、いわゆる縄文遺物包含層からの出土である。包含層は削平されていて残り



第26図　遺構外出土遺物（1／3）

挿図番号	部位	文様・特徴など	色　調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備　考
					繊	角	礫	砂	他		
第26図２	口縁	目鼓条痕文	褐色	条痕文系	○			○		遺構外	
第26図３	胴	目鼓条痕文	黒褐色	条痕文系	○			○		遺構外	内面は暗褐色
第26図４	胴	目鼓条痕文	暗褐色	条痕文系	○			○		484D	内面は褐色
第26図５	胴	目鼓条痕文	赤褐色	条痕文系	○			○	白	494D	内面は暗褐色
第26図６	胴	半截竹管による沈線文	赤褐色	羽状縄文系	○			○		485D	内面は褐色
第26図７	胴	ＲＬ縄文	明褐色	羽状縄文系	○					遺構外	
第26図８	胴	ＲＬ縄文	赤褐色	羽状縄文系	○				褐	遺構外	内面は暗褐色
第26図９	口縁	横位沈線文で口縁部に無文帯を区画／条線文	暗赤褐色	勝坂		○		○		遺構外	
第26図10	胴	沈線文	明褐色	勝坂				○		483D	
第26図11	胴	隆帯／頸部無文帯	明褐色	加曽利ＥⅠ				○		480D	
第26図12	胴	ＲＬ縄文／斜位４本の沈線文	黒褐色	堀之内１		○		○		遺構外	内面赤褐色
第26図13	胴	沈線文	明褐色	堀之内１			○	○	金	遺構外	
第26図14	胴	縦位の沈線文	明褐色	堀之内１		○	○	○		486D	
第26図15	口縁	口唇部上面は平坦／外面に横位の沈線文および太沈線／内面に幅広の沈線文	褐色	後期				○		遺構外	
第26図16	胴	Ｒ縄文	赤褐色	後期		○		○		485D	
第26図17	口縁	短冊を伴う波状口縁／沈線文／ＬＲ縄文／豚鼻状の貼付文	褐色	安行３ｂ？		○		○		遺構外	
第26図18	胴	入組文	明褐色	安行３ｃ？		○	○	○		遺構外	
第26図19	胴	沈線文／列点文	灰褐色	安行３ｃ				○		遺構外	内面明褐色
第26図20	口縁	口縁部直下外面に沈線文／内面は段状に括れる／内面赤彩？	暗褐色	晩期？				○		484D	小型浅鉢
第26図21	口縁	縦位の沈線文／Ｌ縄文？	褐色	粗製土器		○		○	褐	494D	
第26図22	胴	条線	明赤褐色	後期～晩期		○		○		遺構外	

※繊：繊維　角：角閃石・輝石　礫：細礫　砂：砂粒　白：白色粒子　褐：褐色粒子　金：金雲母

第17表　遺構外出土の縄文土器一覧

は悪く、斑状に検出された。

２～５は早期後葉の条痕文系土器片で、内外面で色調が異なるものが多い。

６～８は前期前半の羽状縄文系の土器片である。

９・10は中期中葉の勝坂式土器と思われる。11は中期後葉の加曽利ＥⅠ式土器で、頸部無文帯の破片である。

12～14は後期前葉の堀之内式土器と思われる。15・16は後期の土器と思われるが、詳細不明の土器片である。

17～19は晩期前半の安行３式土器である、20は晩期の小型浅鉢の口縁部小破片で、21は後～晩期の粗製土器の破片である。22は後～晩期の土器片と思われるが詳細は不明である。

３．弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺物（第26図23～30）

高坏形土器（23）

脚台部である。現器高5.3cm・最大径3.0cm。一般的な中空タイプのものではなく、脚柱部は円柱形を呈している。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒・小石を僅かに含む。外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。

壺形土器（25・26）

25は複合口縁を呈する口縁部小破片である。胎土の色調は暗橙色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。。調整は内外面ヘラ磨き調整が施されるが、外面には僅かにハケ目痕が残る。内外面赤彩されると思われる。

26は胴部小破片であろう。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は細かいハケ目調整後、粗いヘラ磨き調整が施される。不明瞭であるが、外面赤彩であろうか。

甕形土器（24・27～30）

24は台付甕の胴部下半から脚台部にかけての破片である。現器高4.1㎝。色調は暗赤褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を多く含む。胴部内面はヘラナデ、その他の内外面はハケ目調整が施される。

27は口縁部小破片である。口唇部外面はハケ状工具による刻みが付される。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。内外面ハケ目調整が施される。

28～30は胴部破片である。28は内面が黒色、外面が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。外面はハケ目調整、内面はヘラ磨き調整であろうか。29は暗橙色を呈し、胎土には橙色粒子・砂粒を含む。内外面ハケ目調整が施されるが、内面は粗いハケ目調整である。30は胴部下半の破片で、内面は黒色を呈し、煤が付着している。胎土には橙色粒子・砂粒を含み、内外面には細かいハケ目調整が施される。

４．中世以降の遺物（図版14－２－31～38、第18表）

31・32は磁器、33～36は陶器、37・38は土器である。33は15世紀代の灰釉皿、37は17世紀代の焙烙で中世に含まれる遺物があるが、他は19世紀以降の近世以降に比定される。

［参考文献］

新屋雅明・菊地　真　2007『久台遺跡Ⅲ』国道122号道路改築事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（　）は現存値及び推定値

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
			器高	口径	底径				
図版14-2-31	磁器	丸碗	4.9	－	(4.0)	外面：菊花文、内面：圏線文、見込み五弁花／遺存度約20%／	肥前系	遺構外	19c
図版14-2-32	磁器	筒碗	－	－	－	口縁部小破片／外面：菊花文、内面：圏線文／	肥前系	遺構外	19c
図版14-2-33	陶器	皿	－	－	－	口縁部小破片／口縁部のみ灰釉	瀬戸	遺構外	15c
図版14-2-34	陶器	灯明具	2.5	－	－	鉄釉／胎土の色調は灰褐色／遺存度約15%	?	遺構外	18c
図版14-2-35	陶器	土瓶	－	－	－	体部上半～中位の破片／鉄釉／胎土の色調は暗茶褐色／胎土には黒色粒子・砂粒を含む／外面底部付近に煤付着	?	遺構外	19c
図版14-2-36	陶器	擂鉢	(5.8)	－	－	底部破片／鉄釉／10本以上を一単位としたハケ目／底部外面に回転糸切り痕あり	瀬戸	遺構外	19c
図版14-2-37	土器	焙烙	－	－	－	口縁部～体部破片／外面黒色	在地系	遺構外	17c
図版14-2-38	土器	焙烙	－	－	－	底部破片	在地系	遺構外	19c

（単位：cm）

第18表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第５章　西原大塚遺跡第124地点の調査

第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

第４章第１節　参照。

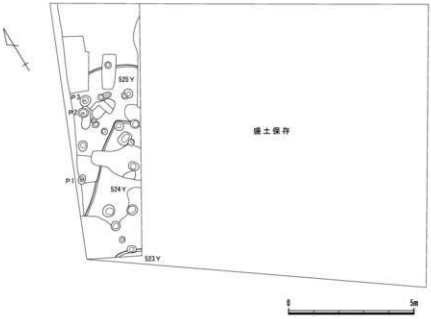
（２）発掘調査の経過

確認調査は、平成17年12月19日に実施した。調査区長軸に合わせ２本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡２軒ほどを確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。

本地点は、南西方向にやや台地が傾斜している斜面地であり、道路が南西側の一番低い箇所に面している。そのため、駐車場を使用するためには、南西側に面する道路の基盤の高さまで掘削せざるを得ない状況であるということから、計画を変更することは不可能であるという回答を得た。なお、建物部分については、保護層30㎝以上を確保することが可能であるということから、今回は駐車場部分については発掘調査を実施し、建物部分については、盛土保存を適用することに決定した。

発掘調査は平成18年１月12日から開始した。以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにする。

１月12日　　重機による表土剥ぎ作業を開始する。まず、駐車場部分を設計図から割り出し、その箇



第27図　遺構分布図（1／150）

所をバックホーを使用し表土を剥ぐ。残土置場は、建物部分を当てることにした。

同時に人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡３軒（523～525Ｙ）を確認した。その後、３軒の住居跡の精査を開始する。

１月13日　523～525Ｙを完掘後、全体写真の撮影を行う。その後、実測を終了させ、すべての調査を完了した。器材搬出作業も完了する。埋戻し作業はなし。

第２節　検出された遺構と遺物

（１）概　要

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡３軒（523～525Ｙ）が検出された。これらの住居跡は、狭小の面積での調査であったため、部分的な確認にすぎなかった。523・525Ｙが曲線的なプランであるのに対し、524Ｙは直線的で方形プランであると思われる。

（２）住居跡

523号住居跡

遺　構（第28図）

［構造］ほとんどが調査区域外であるため、詳細は不明である。（壁高）20㎝前後を測る。（覆土）５層に分層された。

［遺物］壺形土器の小破片１点が図示できたのみである。

［時期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺　物（第28図）

壺形土器の胴部破片である。外面は赤彩される。色調は内面が暗橙色、外面が黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

524号住居跡

遺　構（第29図）

［構造］南半部が調査区域外であり、さらに525Ｙと攪乱により壊されているため、北コーナーと北西壁付近のみが確認できた。（平面形）方形か。（規模）不明。（壁高）10㎝前後を測る。（炉）攪乱下から確認された焼けて赤化した部分が、炉と考えられる。（柱穴）主柱穴は４本と思われるが、検出されたのは２本で、深さはＰ１が58㎝・Ｐ２が57㎝を測る。（貯蔵穴）北コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は55×44㎝、深さ49㎝を測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土を基調とする。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］壺・高坏・甕形土器の小破片が僅かに出土した。

［時期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺　物（第29図）

１は高坏形土器の坏部から脚台部にかけての小破片である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内外面ヘラ磨き調整がていねいに施される。覆土中からの出土である。

２・３は壺形土器の胴部小破片である。２は羽状縄文と結節文が施文される。結節文は端末結節縄文に伴うものであろう。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデが施される。３は外面が赤彩される。胎土の色調は淡橙色を呈し、黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む。内面は部分的にハケ目調整が施されるが、それ以外は指頭による成形痕が残り、指紋が観察できる。いずれも覆土中からの出土である。

４・５は甕形土器の小破片である。４は胴部上半の破片で、色調は内面が黒色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。５は台付甕の脚台部破片である。器形は「ハ」字状を呈し、底端部は平坦である。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はハケ目調整とヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。Ｐ１内からの出土である。

525号住居跡

遺　構（第30図）

［構造］大部分が調査区域外であり、さらに524Ｈと撹乱により壊されている。（平面形）円形か。（規模）不明。（壁高）２～５㎝を測る。（床面）炉の付近に硬化した面が確認された。（炉）住居北側に偏って位置するが、撹乱や後世のピットにより一部壊されている。２ヶ所確認できたため、東側をＡ、西側をＢとする。Ａは104×50㎝の少し不整な楕円形で、炉床は焼けて硬化している。西側からは、炉体土器と思われる壺の破片２点が出土した。土器は６㎝程埋まった状態で検出されており、覆土は焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗赤褐色土を基調とする。Ｂは92×32㎝の楕円形で、掘り込みはほとんどなかった。炉床は暗赤褐色を呈し、８㎝程の厚さで被熱硬化していた。（柱穴）主柱穴は４本と思われるが、検出されたのは２本で、深さは44㎝を測る。Ｐ２は２本の重複形態をとる。（覆土）ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］高坏・壺・甕形土器の小破片が出土した。

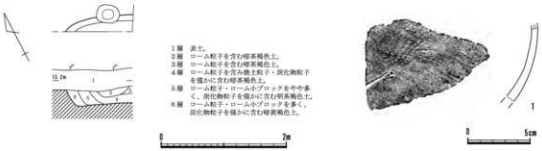
［時期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺　物（第30図）

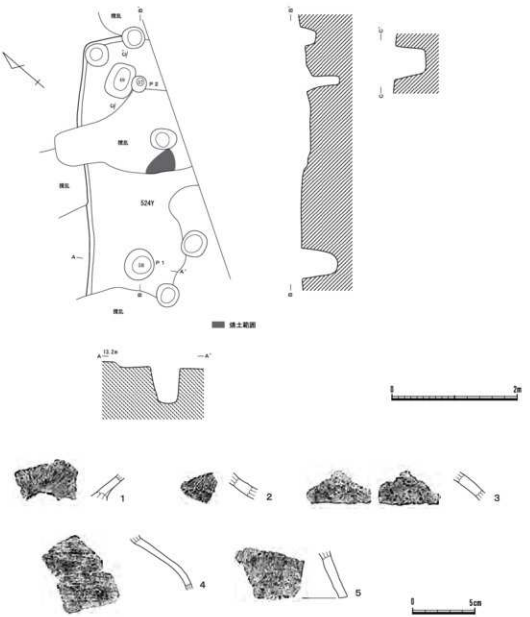
１は高坏形土器の坏部破片である。口縁部はやや内湾気味に開き、下半は一段低く段差を有する。内外面赤彩される。胎土の色調は暗橙色を基調とし、白色粒子・砂粒・小石を含む。内外面はていねいにヘラ磨き調整が施される。Ｐ１内からの出土である。

２・３は壺形土器の胴部破片で、同一個体である。外面は赤彩される。胎土の色調は黄褐色を呈し、黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施されるが、内面はヘラナデを基本とするが、弱いハケ目痕が見られることからハケナデの類であろう。炉跡内からの出土であるため、炉体土器と考えられる。

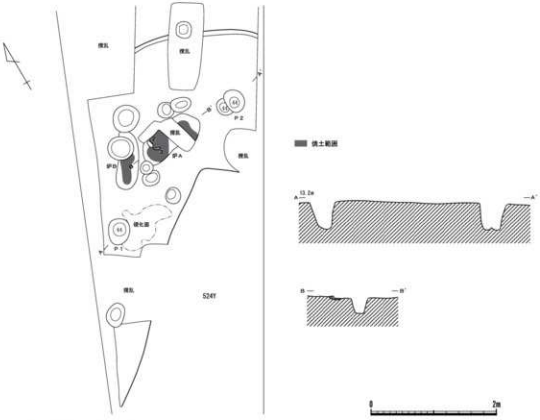
４は甕形土器の胴部小破片である。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

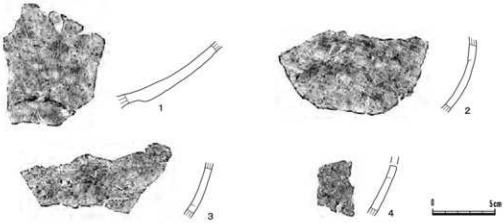


第28図　523号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）

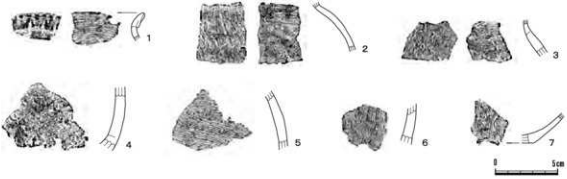


第29図　524号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）





第30図　525号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）



第31図　遺構外出土遺物（1／3）

（３）ピット

住居跡以外の遺構としては、ピット３本（Ｐ１～３）が検出された。遺物としては、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器小破片が僅かに出土したが、小破片のため、図示できなかった。

（４）遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前項までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。遺構外出土遺物としては、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器７点が出土した（第31図）。

壺形土器（１～４）

１は口縁部小破片である。複合口縁を呈し、口唇部外面と複合部下端にはハケ状工具による刻みが付されている。内外面赤彩される。胎土の色調は暗茶褐色を呈し、橙色粒子・砂粒を含む。内面はハケ目調整が施される。２・３は内外面にハケ目調整が施される壺の胴部破片であろう。２は内面が暗黒褐色、外面が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。３は色調が黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。外面は赤彩されている可能性がある。４は胴部破片で、外面は赤彩される。胎土の色調が暗橙色を基調とするが、内面は黒色を呈する。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。

甕形土器（５～７）

すべてハケ甕と思われる。５・６は胴部破片で、５は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ後、粗いヘラ磨き調整が施される。外面はハケ目調整が施される。６は内面が淡茶褐色、外面が黒色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラ磨き調整、外面はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整が施される。７は平底の底部小破片である。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

第６章　調査のまとめ

本書は、平成16・17年度に国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査等を実施した成果を収録したものである。ここでは、発掘調査を実施した城山遺跡第49・57地点、西原大塚遺跡第113・124地点の４地点のうち、古墳時代後期の遺構・遺物と中世以降の遺構についてを簡単にまとめることにする。

第１節　古墳時代後期の遺構・遺物について

古墳時代後期の遺構としては、城山遺跡第49・57地点において、それぞれ住居跡が２軒ずつ、合計４軒（161～164Ｈ）が検出されている。いずれも遺存状態は悪いが、これは主に中世以降に構築された土坑・井戸跡・ピット群によるものである。特に、城山遺跡第49地点の161Ｈは、地下室（360Ｄ）と井戸跡（29Ｗ）が住居内に構築されることにより、カマド等も全壊されたに等しい状態であった。

４軒の住居跡から出土した土器については、須恵器と土師器がある。器種としては、須恵器甕・甕形土器、土師器坏・甑・甕形土器（以下、「形土器」を省略）に分類できる。

ここでは、各住居跡から出土の土器について考えることにしたい。

161Ｈ出土土器（第６図）

土師器甕（１～４）・甑（５）で構成される。

まず、甕はすべて長甕で、器形的には長胴化が完成している。甑はその甕に共通する調整・胎土をもつことから、すべて「在地系土師器」（尾形　2006）と考えられる。

特に、甕の特徴は、口径と胴部最大径を比べると、極端に口径が大きく、口縁部が開くものではないことから、７世紀後半より古い様相であることがわかる。また、１のように長胴化が進み、かなり器高が高く、薄手で、口縁部と胴部の境にやや横ナデによる段が形成されるタイプは、７世紀前半より新しい特徴と言える。そのため、坏などの小型製品がない状況で、細かい時期設定を行うのはやや難しいと考えられるが、一応、７世紀中葉の所産と言えるであろう。

甑は筒抜け式のもので、内面のヘラ磨きが縦方向に密に施されることから、７世紀後半以前の特徴と言える。甕同様に７世紀中葉に比定できるであろう。

162Ｈ出土土器（第７図）

土師器甕（１）と須恵器甕（２）の２点のみの出土である。

土師器甕は161Ｈ同様に長甕の器形を呈し、在地系土師器である。長胴化の完成した器形であるが、口径が胴部最大径を上回らず、胴部上半にやや膨らみをもつタイプであることから、時期は161Ｈよりやや古い、７世紀前葉に比定できるものであろうか。

須恵器甕は小破片で、全体の器形を把握することが不可能であるため、時期については設定が難しい。肩部にはヘラ描沈線による横位沈線文が１本施文され、その上方に波状文と思われる文様が観察される。陶邑製品の可能性がある。

163Ｈ出土土器（第15図）

住居跡内に後世の土坑・ピット群が集中するため、出土した土器でも混入品が含まれる可能性がある。

土器は土師器坏（１～３）・甑（４）、須恵器甕（５）で構成される。ここでは、土師器についての時期を考えることにする。

まず、坏は２と３は深身タイプで、２は全面赤彩が施される赤色系の有段坏であり、３は推定口径14㎝を測り、口縁部と底部の境に弱い段を有する有段坏である。どちらも、６世紀前葉の時期に比定できると考えられる。

しかし、１は口縁部が短く、浅身タイプであり、推定口径13㎝で、特に外面の口縁部直下には無調整部分をもつ特徴は、無彩系土器と考えられる。つまり、この土器は７世紀以降の在地系土師器と考えられることから、混入品の可能性がある。

また、４の甑は多孔式の底部小破片である。この多孔式の甑については、市内において、「概して大型甑形の口縁部が複合口縁から単純口縁へと定形化し、甕の変化に応じた変化を繰広げ始める段階に出現」（尾形　1991）するとされ、７世紀以降の特徴と考えられるため、この土器についても混入品の可能性がある。

以上、本住居跡の時期設定においては、１・４が混入品の可能性があり、決して出土土器が安定した状況を示しているとは言えないが、ここでは２・３から、６世紀前葉に位置付けることにした。

164Ｈ出土土器（第16図）

土器は土師器坏２点（１・２）のみの出土である。

１は赤色系土器で、推定口径11.4㎝の小型品である。従来のいわゆる比企型坏であるが、胎土の色調が暗赤褐色を呈することから、「入間系土師器」と考えられる（尾形　2008）。

２は無彩系の有段坏で、在地系土師器である。推定口径12㎝であり、１と同様に小型化の傾向であることから、７世紀中葉に比定できるであろう。

いずれも小型化の傾向であるが、最小化ではないことから、７世紀中葉に比定できるであろう。

以上、住居跡を古い順序から並べてみると、６世紀前葉は163Ｈ、７世紀代は前葉が162Ｈ、中葉が161・164Ｈと言えることができる。

第２節　中世以降の遺構について

（１）城山遺跡第49地点で検出された365号土坑について

本遺構の形態をもつ土坑は、現時点では、城山遺跡内の柏の城跡内部にのみに検出される特異なものである。これらは、土坑の坑底の角隅に掘り込みをもつもので、今までの調査での類例をまとめると、城山遺跡第１地点（佐々木・尾形　1988）で７・10・21・23・24・26号土坑の６基、第42地点（尾形・深井・青木　2005）では、Ｂ群４類の火床部を有する土坑に分類した178・179・187・214・215Ｄの５基が検出されている。合計では、本地点の365Ｄを含め12基である。

１．基本構造と形態分類

基本構造については、第19表にまとめた。また、これら12基の土坑については、形態的な特徴から、

以下のように分類できる。

Ａ群　方形を呈する　６基（21・23・24・26・178・179Ｄ）

Ｂ群　長方形を呈する　６基（１類－４基、２類－２基）

１類　掘り込み部を１ヶ所もつ（７・187・214・215Ｄ）

２類　掘り込み部を２ヶ所もつ（10・365Ｄ）

Ａ群　方形を呈する

平面形が方形を呈する土坑は、基本的に掘り込み部がすべて１ヶ所である。城山遺跡第１地点の21・23・24・26Ｄと第42地点の178・179Ｄの合計６基である。

特に、掘り込み部の位置について着目すると、北西コーナーにあるもの多く、６基中４基であった。23Ｄは北東コーナー、24Ｄは南西コーナーである。そのうち、火床部をもつものは、21・23・178・179Ｄの６基中４基であった。

Ｂ群　長方形を呈する

平面形が長方形を呈する土坑は、掘り込み部が１ヶ所と２ヶ所がある。１ヶ所のものを１類とすると、城山遺跡第１地点の７Ｄと第42地点の187・214・215Ｄの合計４基、２ヶ所のものを２類とすると、城山遺跡第１地点の10Ｄと第49地点の365Ｄの２基である。

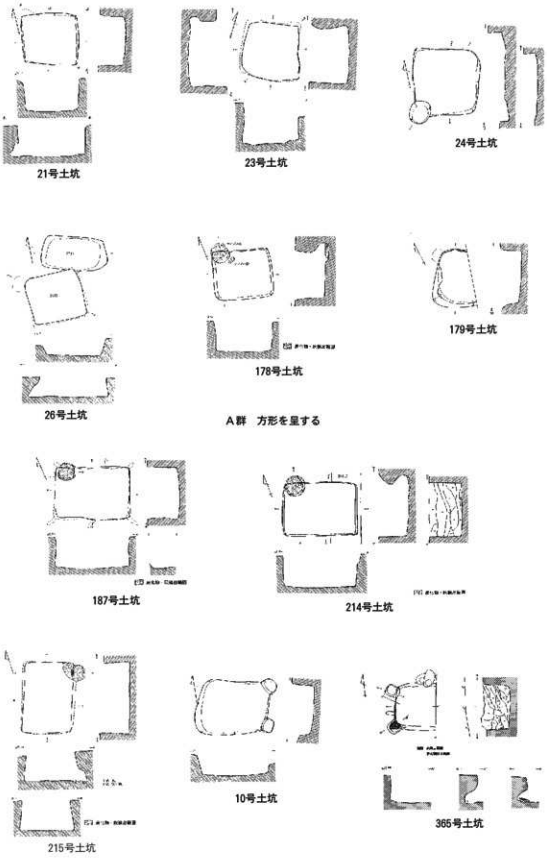
掘り込み部の位置については、１類では北西コーナーが187・214Ｄの２基、北東コーナーが215Ｄの１基、図示していないが、７Ｄは南東コーナーに設置されている。２類では、10Ｄが東側に、365Ｄが西側に２個ずつ設置されている。そのうち、火床部をもつものは、７・187・214・215・365Ｄの６基中５基であった。特に、365Ｄについては、２つある掘り込みのうち、北西コーナーにある部分には燃焼された痕跡がなく、火床部は確認できなかった。

２．用途について

これらの形態をもつ土坑については、現時点で志木市の城山遺跡でも特に、「柏の城」の城内においてのみの検出であるため、基本的には、「柏の城関連」の遺構と考えるのがごく自然であろう。『舘村日記』の「柏の城区画割図」（志木市　1986）を参照すると、「柏の城」の中でも「三の丸」内に集中することが理解できる。

土坑の時期については、良好な出土遺物がないことから、正確な時代観を把握するのは困難であるが、12基中２例について、すなわち第42地点の179Ｄと今回の第49地点の365Ｄが16世紀後半～17世紀初頭という時期設定の中で把握できるものとなっている。その時期を設定した遺物については、179Ｄでは、陶器・土器・板碑があるが、そのうちの瀬戸・美濃系（連房第１小期）の擂鉢と志野丸皿の２点が基本となる。365Ｄは常滑の大甕が坑底面から出土しており、その時期から16世紀後半～17世紀初頭が設定可能である。

この時期について、野澤　均氏は「柏の城」の落城の時期であると考えている。つまり、遺構として把握するならば、この16世紀後半～17世紀初頭の時期以前、まさに柏の城が機能していた時期に相当すると言うものである。これにより、この土坑については、城山遺跡の報告中で、中・近世の総括を野澤氏にお願いしたが、用途については、「仮設の兵站施設」（野澤　2005）の可能性があると分析している。この野澤氏の分析については、唯一用途の面について触れている内容であり、今後の参考になるであろ



第32図　城山遺跡における掘り込み部をもつ土坑集成（1／120）

No.	地点名	土坑	平面形	規　模	深さ	長軸方向	掘り込み			遺　物	時　期	備　考
							数	位置	火床部			
1	第１地点	7D	長方形	2.20×1.85m	0.1m前後	N-81°-W	1ヶ所	南東隅	有	なし	中・近世	住居内に構築のため、上層部は確認できなかった／炭化材・骨粉が検出された
2		10D	長方形	2.30×1.70m	0.6m	N-82°-W	2ヶ所	北東隅／南東隅	無	陶器	中・近世	
3		21D	方形	1.80×1.65m	1.0m	N-77°-W	1ヶ所	北西隅	有	なし	中・近世	炭化材・骨粉が検出された
4		23D	方形	1.80×1.70m	1.25m	N-10°-W	1ヶ所	北東隅	有	なし	中・近世	炭化材・骨粉が検出された
5		24D	方形	2.15×2.05m	0.45m	N-12°-E	1ヶ所	南西隅	無	なし	中・近世	
6		26D	方形	1.70×1.55m	0.60m	N-88°-E	1ヶ所	北西隅	無	なし	中・近世	
7	第42地点	178D	方形	1.90×1.57m	0.99m	N-74°-W	1ヶ所	北西隅	有	陶磁器・土器・瓦が出土したが、図示できるものはなかった	近世	炭化物・灰は分析実施／イネ・ヒエ・アワ
8		179D	方形か	不明×1.87m	0.80cm	N-65°-W	1ヶ所	北西隅	有	陶器・土器・板碑	17世紀初頭	
9		187D	長方形	2.37×1.70m	1.03m	N-67°-W	1ヶ所	北西隅	有	土器・鉄製品・銅製品・板碑	中・近世	各コーナーと長軸中央に2本の合計6本の小ピットあり／炭化物・灰は分析実施／オオムギ・コムギ・ヒエ・アワなど
10		214D	長方形	2.40×1.74m	1.09m	N-72°-W	1ヶ所	北西隅	有	陶磁器・土器・板碑	近世	炭化物・灰は分析／イネ・コムギ・ヒエ・アワなど
11		215D	長方形	2.27×1.53m	1.02m	N-17°-W	1ヶ所	北東隅	有	陶磁器・土器が出土したが、図示できるものはなかった	近世	炭化物・灰は分析／イネ・ヒエ・アワなど
12	第49地点	365D	長方形か	不明×1.08m	0.87m	N-7°-E	2ヶ所	北西隅／南西隅	1ヶ所有	陶器破片数点	16世紀後半～17世紀初頭	炭化物・灰が検出された

第19表　城山遺跡における掘り込み部をもつ土坑一覧

う。

３．今後の課題

以上、城山遺跡で特有の掘り込み部をもつ土坑の基本的構造や用途についてに触れたが、今後の課題について列記することで、まとめに代えることとしたい。

①掘り込み部をもつ土坑は、火床をもつ土坑とは、その構造や掘り込みの特徴から、ほぼ同一の遺構と把握しても間違いではない。しかし、掘り込み部が存在しても火床部をもたない10・24・26Dの３基が存在することで、今後はその用途について考える上でも重要な事項となるであろう。

②本土坑の分布を城山遺跡全体あるいは「柏の城」の配置という観点から分析する必要がある。本稿ではできなかったが、分布状況から、火床部の位置関係などについても法則性を見い出せる可能性がある。例えば、主軸方向（長軸・短軸問わず）は、おおよそ北に向かって東側に10度前後という傾きで安定して構築されていると言える。これは、土地の区割方向または「柏の城関連」の三の丸大堀跡である１Ｍの走向方位にほぼ一致することから、その構築背景には、何らかの条件や規制があったものと考えられる。

③火床部をもつものには、堆積物として、炭化物・灰物質が出土している。これについては、第42地点で灰質土壌の微細物分析と炭化物同定の自然科学分析を行った結果、これらはイネ科植物を中心にヒエ・アワ・コムギなどであり、炭化物の中には種子を含む試料が多いことから、「全体的にイネ科植物を焼いた際の灰物質である」ことが判明した（藤根・鈴木・新山・植田　2005）。なお、第１地点の報告では、第42地点で検出された同類の炭化物・灰物質について自然科学分析も行わな

いうちから、「炭化材・骨粉」と把握し、「墓壙」と記述してしまったが、これらについても第42地点と同様の内容と思われる。いずれにせよ、今後は、この分析結果の意味するところが何であるのか考古学的な見地で統合的に分析する必要がある。

［引用・参考文献］

尾形則敏　1991「第３節　まとめ」『西原大塚遺跡第７地点　新郡遺跡第３地点　中野遺跡第７地点　中野遺跡第８地点　城山遺跡第６地点発掘調査報告書』志木市の文化財第15集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏　2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義―武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例―」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立50周年記念論文集

尾形則敏　2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識―（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として―」『埼玉の考古学』第43号　埼玉考古学会

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2005『城山遺跡第42地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

佐々木保俊・尾形則敏　1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第４集　埼玉県志木市遺跡調査会

野沢　均　2005「第４章第４節　中・近世における城山遺跡の総括」『城山遺跡第42地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

藤根　久・鈴木　茂・新山雅弘・植田弥生　2005「Ⅱ、土坑内土壌の微細物分析・炭化物同定」『城山遺跡第42地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

志木市　1986『志木市史　中世資料編』

［付　　編］

自然科学分析

城山遺跡出土動物遺体について

黒澤　一男（パレオ・ラボ）

城山遺跡第49・57地点から検出された骨片および貝殻片についての分類・同定を行なった。以下に結果を試料毎に記す（写真１、第20表）。

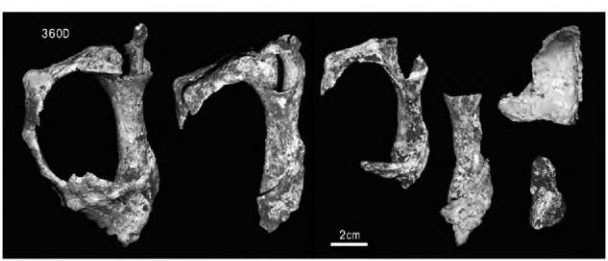
【第49地点　360D】

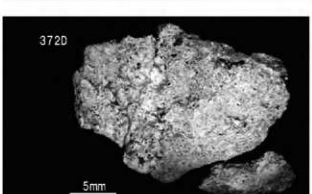
これらの試料はアカニシである。いずれの貝殻片もチョーク化しており、螺塔が残存しておらず、非常に柔くなっている。その中で比較的残りのいい３個体はいずれも殻口反対側の体層が残っていない。保存の問題も考えられるが、おそらく中の肉を取り出す際にあけられた跡と考えられる。

アカニシは北海道以南の水深30m以浅の砂泥底に生息している。浅海域で採取される大型食用巻貝であり、サザエとともに多くの遺跡から出土している。

【第57地点 372D】

この試料は、大きさ23㎜×17㎜ほど、骨厚５㎜程度の緻密質部分の骨片である。保存状態が非常に悪く、元の形状を全くとどめていない。その緻密質の表面はザラザラになっており、緻密質全体がスポンジ状になっている。保存状態が悪いため、同定は不可能であるが、このようなしっかりとしていない緻密質からヒトもしくは家畜の可能性が考えられるが、状態が悪いため可能性を示唆するにとどめる。





地点名	試料番号	種名	備考
第49地点	360D	アカニシ	３個＋破片
第57地点	372D	骨片	

第20表　城山遺跡出土動物遺体リスト

上：アカニシ（第49地点）下：骨片（第57地点）

写真１　城山遺跡出土動物遺体

図　　版

1．表土剥ぎ風景

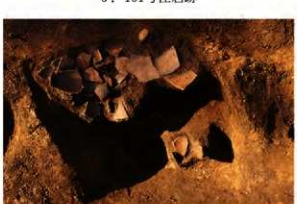
2．調査風景

3．366号土坑

4．161号住居跡

5．161号住居跡

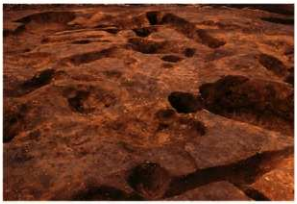
6．161号住居跡遺物出土状態



7．161号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

8．161号住居跡貯蔵穴

1．162号住居跡



2．162号住居跡

3．162号住居跡カマド

4．29号井戸跡

5．29号井戸跡・360号土坑竪坑

6．360号土坑板碑出土状態

7．360号土坑

8．360号土坑

1．発掘風景

2．362号土坑

3．364号土坑

4．365号土坑遺物出土状態

5．365号土坑遺物出土状態

6．365号土坑北西掘り込み遺物出土状態

7．365号土坑掘り込み

8．365号土坑

1．161号住居跡出土遺物

2．162号住居跡出土遺物

1．360号土坑出土遺物

2．365号土坑出土遺物

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

遺構外出土遺物

1．調査区近景

2．確認調査風景

3．375号土坑

4．376号土坑

5．377号土坑

6．163号住居跡

7．163号住居跡貯蔵穴

8．163号住居跡カマド

1．163・164号住居跡

2．163・164号住居跡北から

3．164号住居跡

4．367号土坑

5．367号土坑竪坑

1．発掘風景

2．368・369号土坑

3．370号土坑

4．371号土坑

5．372号土坑

6．373号土坑

7．374号土坑

8．30号井戸跡

1．土坑出土遺物

2．163号住居跡出土遺物

3．164号住居跡出土遺物

4．ピット出土遺物

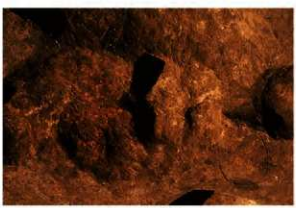
5．遺構外出土遺物1

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

遺構外出土遺物２

1．調査区近景

2．表土剥ぎ風景



3．15号炉跡

4．480号土坑

5．481号土坑

6．482号土坑

7．483号土坑

8．484号土坑

1．485号土坑

2．486号土坑

3．487号土坑

4．489号土坑

5．491号土坑

6．485・493号土坑

7．494号土坑

8．調査区東側

1．15号炉跡・土坑出土遺物

2．遺構外出土遺物

1．調査区近景

2．表土剥ぎ及び遺構確認調査風景

3．523号住居跡

4．524号住居跡

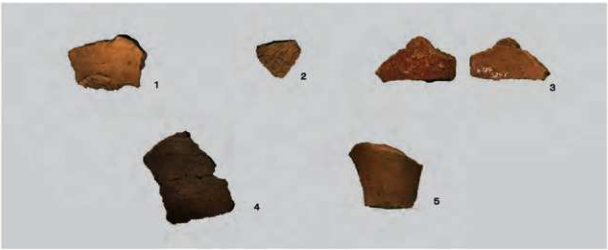
5．524号住居跡

6．525号住居跡

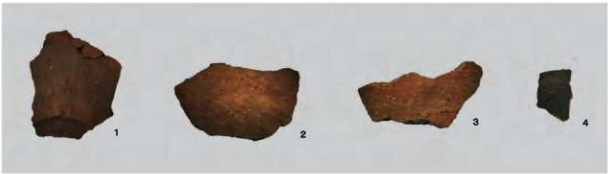
7．525号住居跡

8．525号住居跡炉跡

1．523号住居跡出土遺物



2．524号住居跡出土遺物



3．525号住居跡出土遺物

4．遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しきしいせきぐん 17		
書　　名	志 木 市 遺 跡 群 17		
副 書 名			
シリーズ名	志木市の文化財	巻　　次	第39集
編 著 者	尾形則敏　深井恵子　青木　修		
編 集 機 関	埼玉県志木市教育委員会		
所 在 地	〒353－0002　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号　TEL 048（473）1111		
発行年月日	平成20（2008）年11月14日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
城山遺跡 （第49地点）	志木市柏町３丁目 1137－12	11228	003	35° 49′ 56″	139° 34′ 7″	20050111 ～ 20050203	132.21	個人住宅建設
城山遺跡 （第57地点）	志木市柏町３丁目 1137－14	11228	003	35° 49′ 56″	139° 34′ 7″	20050829 ～ 20050924	165.30	個人住宅建設
西原大塚遺跡 （第113地点）	志木市幸町２丁目 3038－１・３・13の 各一部	11228	007	35° 49′ 37″	139° 33′ 56″	20050204 ～ 20050215	119.75	個人住宅建設
西原大塚遺跡 （第124地点）	志木市幸町３丁目 3100－１の一部	11228	007	35° 49′ 27″	139° 33′ 46″	20060112 ～ 20060113	150.02	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山遺跡 （第49地点）	集落	縄文時代 古墳時代後期 中世以降	土坑　1基 住居跡　2軒 土坑　5基 地下室　1基 井戸跡　1基 ピット群	土器 土師器 陶磁器・土器・土製品 陶磁器・土器 陶磁器・土器 陶磁器・土器？	
城山遺跡 （第57地点）	集落	縄文時代 古墳時代後期 中世以降	土坑　3基 住居跡　2軒 土坑　6基 土坑墓　1基 地下室　1基	土器 土師器 陶磁器・土器 骨片	
西原大塚遺跡 （第113地点）	集落	縄文時代早期 近世以降	炉穴　1基 土坑　16基	土器 陶磁器・土器	
西原大塚遺跡 （第124地点）	集落	弥生時代末葉～ 古墳時代前期	住居跡　3軒	土器	

志木市の文化財　第39集

志木市遺跡群 17

発　　行　埼玉県志木市教育委員会
　　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発 行 日　平成20（2008）年11月14日
印　　刷　株式会社　白　峰　社